

若江遺跡第85次発掘調査報告

2008. 3

東大阪市教育委員会

はしがき

今回の調査では、若江城に伴う堀などの遺構とともに、弥生時代から江戸時代にわたる多くの遺物を検出しました。堀は若江城の中心部を画する外堀の一部で、城状況を窺える遺構であり、多量の遺物は、本遺跡が弥生時代から現在まで連綿と人々の生活が営まれていたことを裏付けています。

本書の内容は、地域史解明の一助になるものと思っています。
現地調査および遺物整理・報告書作成にあたってご協力・ご教示を賜った関係諸機関・諸氏に感謝するとともに、今後一層のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

平成20年3月

東大阪市教育委員会

例　　言

1. 本書は共同住宅建設に伴う若江遺跡第85次発掘調査の概要報告書である。
2. 調査地は大阪府東大阪市若江南町2丁目73番1である。
3. 本調査は株式会社小滝工務店の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。
4. 調査にかかる費用は全額株式会社小滝工務店が負担・用意した。
5. 第85次調査は平成19年11月12日から12月7日まで発掘調査を行ない、遺物整理および報告書作成作業は平成20年3月31日まで実施した。
6. 調査は若松博志が担当し、遺物整理については才原金弘が行なった。
7. 遺物写真はO.P.Cカメラ店に委託して実施した。
8. 本書はⅠ・Ⅱ・Ⅲ-1～3およびⅣを若松、Ⅲ-4を才原が執筆し、若松が編集した。遺物の記述にあたっては、Ⅲ-4の遺物掲載順に通し番号を付した。
9. 現地の上色及び上器等の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究所色彩監修『新版 標準上色帖』(2000年版)に準拠し、記号表記もこれに従った。
10. 調査及び報告書作成にあたっては下記の方々のご協力・ご教示を賜った。記して謝意を表します
(敬称略・順不同)。
株式会社小滝工務店、株式会社島田組、株式会社ジオテクノ関西
11. 現地調査及び遺物整理・報告書作成には下記の方々の参加を得た。
西村和浩、吉岡泰央子、朝平琴、四川由里子、秋吉由美子

本文目次

I.	調査に至る経過	1
II.	位置と環境	2
III.	調査の概要	3
1.	調査の方法と経過	3
2.	層位	4
3.	造構	8
4.	出土遺物	17
VI.	まとめ	32

挿図目次

第1図	調査地および其の周辺調査位置図	1
第2図	遺跡周辺図	2
第3図	調査トレンチ位置図	3
第4図	N地区南断面実測図	4
第5図	S地区西断面写真および実測図	5・6
第6図	SW地区東断面(部分-北側-) 実測図	7
第7図	第6造構平面実測図	8
第8図	第5造構平面実測図	9
第9図	第5造構N地区平面実測図	10
第10図	第4造構平面実測図	11
第11図	第4造構N地区平面実測図	12
第12図	第3造構平面実測図	13
第13図	第2造構平面実測図	14
第14図	第1造構平面実測図	15
第15図	土4西断面実測図	16
第16図	S地区堀1・土1出土土器実測図	18
第17図	S地区第1~9層出土土器実測図	19
第18図	S地区第1~9層出土上土器実測図	20
第19図	S地区第1~9層出土土器実測図	21
第20図	S地区第12層、堀肩出土土器実測図	23
第21図	S地区土A出土土器実測図	24
第22図	S地区石器実測図	25
第23図	S地区製塙土器・埴輪・瓦・上製品実測図	26

第24図	S地区瓦実測図	27
第25図	N地区堀2・土坑3・土坑4出土上器実測図	28
第26図	N地区第1層・第2層・第3層・第2・3層・整地土2・3出土上器実測図	29
第27図	N地区製塙土器・瓦実測図	31

図 版 目 次

- 図版1 遺構 調査地周辺航空写真（1942年）
- 図版2 遺構 N地区（第4遺構）・S地区（第3遺構）写真測量合成図
- 図版3 遺構 1. N地区第5遺構（北より）
2. N地区第6遺構（北より）
3. N地区南断面（北より）
- 図版4 遺構 1. N地区第1遺構（西より）
2. N地区第4上面遺構（北より）
3. N地区第4上面遺構（西より）
- 図版5 遺構 1. SW地区第6遺構（南より）
2. SW地区東断面（一部・西より）
3. SE地区北断面（一部・南より）
- 図版6 遺構 1. SW地区第3遺構（南より）
2. SW地区第3上面遺構（北より）
3. SW地区南断面（北より）
- 図版7 遺構 1. SE地区第2遺構（北より）
2. SE地区第3遺構（南より）
3. SE地区第3遺構（一部・南より）
- 図版8 遺構 1. SE地区第1遺構（北より）
2. SW地区第1上面遺構（南より）
3. 土4断面（東より）
- 図版9 遺物 1. S地区堀1・土1、第1～9層出土弥生土器 蓋・底部、庄内式土器 蓋、須恵器 蓋、土師器 皿
2. S地区第1～9層出土庄内式土器 蓋、布留式土器 蓋、須恵器 蓋・杯・壺・盤・捏鉢
- 図版10 遺物 1. S地区第1～9層出土輸入磁器 梶・皿、陶器 捣鉢、黑色土器 梶、瓦器 梶
2. S地区第1～9層出土瓦器 梶・羽釜・捣鉢
- 図版11 遺物 1. S地区第1～9層出土瓦器 羽釜
2. S地区第1～9層出土瓦器 捣鉢、土師器 杯・壺・高杯・皿・羽釜
- 図版12 遺物 1. S地区第1～9層出土土師器 皿
2. S地区第1～9層出土上師器 皿・杯

- 図版13 遺物 1. S地区第12層、堀肩出土瓦器 握鉢・羽釜・甕・深鉢、須恵器 杯・捏鉢
2. S地区堀肩出土庄内式土器 甕、布留式土器 甕・須恵器 杯・瓦器 楠・土
師器 皿、陶器 握鉢
- 図版14 遺物 1. S地区土A出土瓦器 楠（外面）
2. 同上（内面）
- 図版15 遺物 1. S地区土A出土瓦器 楠・皿（外面）
2. 同上（内面）
- 図版16 遺物 1. S地区製塙土器、埴輪
2. S地区石器 紡錘車、上製品 繩の羽口
- 図版17 遺物 1. S地区瓦 平瓦（内面）
2. 同上（凹面）
- 図版18 遺物 S地区瓦 軒丸瓦・軒平瓦
- 図版19 遺物 1. N地区堀2、土坑3、土坑4出土瓦器 握鉢、土師器 杯・皿、須恵器 高杯、
輸入器 楠
2. N地区土坑4出土土師器 皿、瓦器 握鉢・羽釜・甕
- 図版20 遺物 1. N地区第1層、第2層、第3層、第2・3層出土瓦器 握鉢・深鉢、土師器
皿
2. N地区第2・3層、整地土2、整地土2・3出土土師器 杯・羽釜・甕、陶器
握鉢、瓦器 羽釜・深鉢、須恵器 杯、布留式土器 甕
- 図版21 遺物 1. N地区堀2、第1層、第2・3層、整地土2・3出土瓦器 楠、土師器 皿、
製塙土器
2. N地区瓦 軒平瓦・軒丸瓦

I. 調査に至る経過

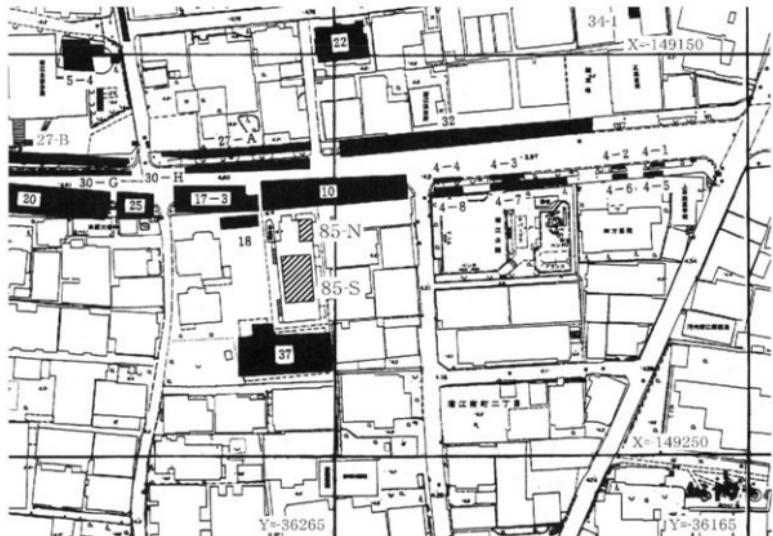
若江遺跡は、若江城跡を中心とする弥生時代から江戸時代にわたる複合遺跡である。府道大阪東大阪線の拡幅工事をはじめ下水道、学校関連施設、ビル・住宅建設などに伴い、昭和45年以降84次に及ぶ発掘調査が実施されてきた。

平成19年9月13日、株式会社小滝工務店から若江南町2丁目73番1において共同住宅建設の届出があった。当該地はこれまでの発掘調査から周辺で若江城関連の遺構・遺物が色濃く検出されており、北接する府道大阪東大阪線の拡幅に伴う調査で中世の溝・上坑・井戸など（第10次、文献1）、西接の調査では平安時代末～室町時代の掘立柱建物・井戸など（第18次、文献2）、南接の調査ではL形の堀の南肩・西肩など（第37次、文献3）が検出されていた。

そのため、建設予定地内の南北にトレーニングを設定して確認調査を実施したところ、両トレーニングとも堀内と思われる埋土と堆積土および土師器などの遺物を検出した。その結果に基づき、代理者をも含めて協議を行ない、埋蔵文化財に影響を与える建物および立体駐車場部分を対象とし、東西隣地との安全のため一定間隔をひかえて調査範囲を設定し、第85次として発掘調査を実施することになった。

＜文献＞

- 1.『若江遺跡発掘調査報告書 I 遺構編』東大阪市遺跡保護調査会 1982年
- 2.『若江遺跡発掘調査報告書 I 遺物編』東大阪市遺跡保護調査会 1983年
- 2.『若江遺跡3D U 8 地区の調査』『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要 1979年度』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報21 東大阪市教育委員会 1980年
- 3.『若江遺跡第37次発掘調査報告書』『埋蔵文化財発掘調査概報集 -1998年度(2)-』財團法人東大阪市文化財協会 1999年



第1図 調査地および主な周辺調査位置図 (1/1200)

II. 位置と環境

「若江の中央を通ったが此所には今城もなく、唯多数の住民の居る町のみがあった。」

これは天正9年（1581年）4月14日に宣教師ルイス＝フロイスがローマに書き送った書簡（『日本耶蘇会年報』）の一節であり、同年2月24日の若江の様子を記したものである。この時期を最後に若江は政治史の表舞台から姿を消すことになる。

この若江が日本政治史上に姿を現すのは室町幕府が成立し、畠山氏が河内国の守護に任せられてからのことである。この地は河内のほぼ中央に位置する要衝の地であったことから、城が築かれて守護所としての役割を果たし、守護代の遊佐氏が居城していた。応仁・文明の乱以降、戦国時代にかけて各地に城が築かれた。この時期、畠山氏の内紛、三好氏の興亡、石山本願寺合戦など多くの戦いが繰り広げられ、その都度、若江城は戦乱に巻き込まれたのである。

若江城を中心とした若江遺跡は、東大阪市の南部中央、現在の東大阪市若江北町・若江本町・若江南町一帯に位置する。この地は東に生駒山地が連なり、西に大阪湾を擁する大阪平野の中央、標高5mの所にある。大阪平野は、淀川と旧大和川－玉串川、吉田川、菱江川、楠根川、長瀬川など、平野川、恩智川などのもたらした土砂の堆積によって形成された沖積平野である。江戸時代・宝永元年（1704）の大和川付け替え以前は多くの川が北・北西方向に走り、若江周辺には低湿地が広がっていたが、この地は微高地をなしていた。



第2図 遺跡周辺図 (1/25000)

III. 調査の概要

1. 調査の方法と経過

調査の方法

今回の調査地は、府道大阪東大阪線に南接する地で、共同住宅建設地（S地区）と立体駐車場地（N地区）の2箇所について、発掘調査を実施した。調査は残土を搬出することなく、調査敷地内にて対応することから、S地区を東西2回（SE地区・SW地区）に分け、SE地区とN地区を先行し、両地区的調査終了後に埋め戻し、反転してSW地区の調査を行なった。調査範囲はN地区・S地区計177.9m²を対象とし、調査深度が2m近くにおよぶことから、調査に際して各調査地とも4側壁は安全のり面をつけた。盛土および旧耕土など現代の土層については機械掘削によって除去し、以下調査底面までは人力掘削により調査をした。現地での調査は平成19年11月12日から12月7日まで行なった。調査に際し、N・S地区各1面とS地区西断面については写真測量を実施した。また、工事施工の基礎掘削時の平成20年2月21・22日に、発掘調査時におけるのり面部について一部立会調査を実施した。

整理等作業は、発掘調査にはほぼ平行して出土遺物の洗浄とその登記作業をしていったが（出土遺物台帳作成）、調査終了後、同作業を本格的に行なうとともに注記、接合作業を実施した。その後、遺物による遺構・層位の時期を確認しながら、報告書刊行に向けて必要な遺物をセレクトし、復元および実測図（拓影を含む）の作成を行なった。土器類・石器・埴輪・瓦の実測図は地区別に、主に層位・遺構ごとにレイアウトし、原稿執筆しながら割付を行ない、トレースして遺物版下を作成した。層位図・遺構図は張り合わせ作業をはじめ図面の整理・検討を行ない、株式会社ジオテクノ関西が実施した写真測量図の校正を行なった。層位・遺構図はレイアウトし、原稿執筆しながら割付を行ない、トレースして遺構版下を作成した。上記の遺物（土器・石器・土製品など）の写真撮影は、O.P.Cカメラ店に委託して実施し、選択した遺構写真を含め、焼付けしたのち写真版下を作成した。遺構・遺物等の主要原稿・版下等の完成後、写真測量図等を集成して、目次・まとめ・報告書抄録等を加えて編集し、印刷へ渡した。その後、遺物・図面・写真的登録作業を行なった。

府道大阪東大阪線

歩道

N地区



S地区



第3図 調査トレンチ位置図 (1/250)

2. 層位（第4～6図）

調査地点周辺は、人幹線道路である府道大阪東大阪線の舗装に合わせてやや厚く盛土されていた。本調査ではN地区とS地区の2調査地に分かれ、同一または相当層はいくつか見られたが、層位状況は相違していた。そのため、両調査地の層位の相関関係をいくつかの特徴的な層をもとにして、基本層位を記しておく。

〈基本層位〉 — () 内の層番号はS地区のもので、N地区的ものはそれを明記した。—

1 旧耕土 瓦器深鉢 (139)、製塩土器 (156)、巴文軒丸瓦 (161) をはじめ土師器・磁器などが出土。

2 にぶい黄褐色小礫・砂混じり土 整地層 土師器皿 (140・141)、瓦器擂鉢 (142) などが出土。第1遺構検出面。

3 黄褐色シルト質粘土混じり砂など 砂堆積層 土師器皿 (147) などが出土。

2・3層には土師器皿 (143・144)、土師器杯 (145)、瓦器椀 (146) をはじめ土師器・磁器などが出土。

4～6 大溝埋土層

灰黄褐色砂混じり粘土質土、暗灰黄色砂礫混じり土など。

7～9 大溝堆積層

黄灰色砂混じりシルト質土、灰色シルト質粘土、暗緑灰色砂混じり粘土など。

これらの層から、弥生土器、須恵器、陶器、白磁、青磁、瓦器、黒色土器、土師器、製塩土器、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、滑石製品、磁器など多量の遺物が出土。

大溝形成層 (10～12層) 第2遺構検出面。

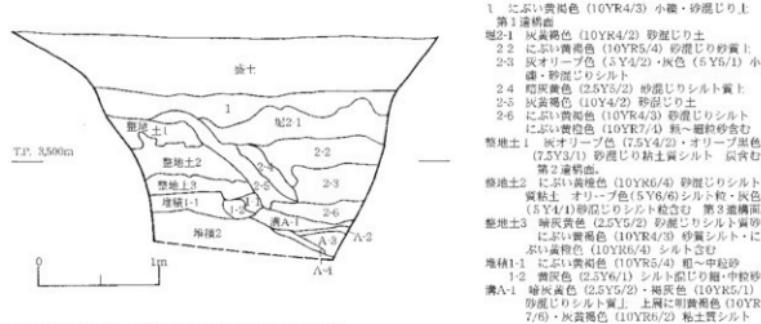
にぶい黄橙色中・細粒砂混じりシルト質粘土など。製塩土器 (100・102・103)、瓦器擂鉢 (67)、須恵器、陶器、瓦器、土師器、平瓦、磁器などが出土。

塙1 埋土層 (13層)

灰黄色・褐灰色砂混じりシルト質土など。須恵器、陶器、瓦器、土師器などが出土。

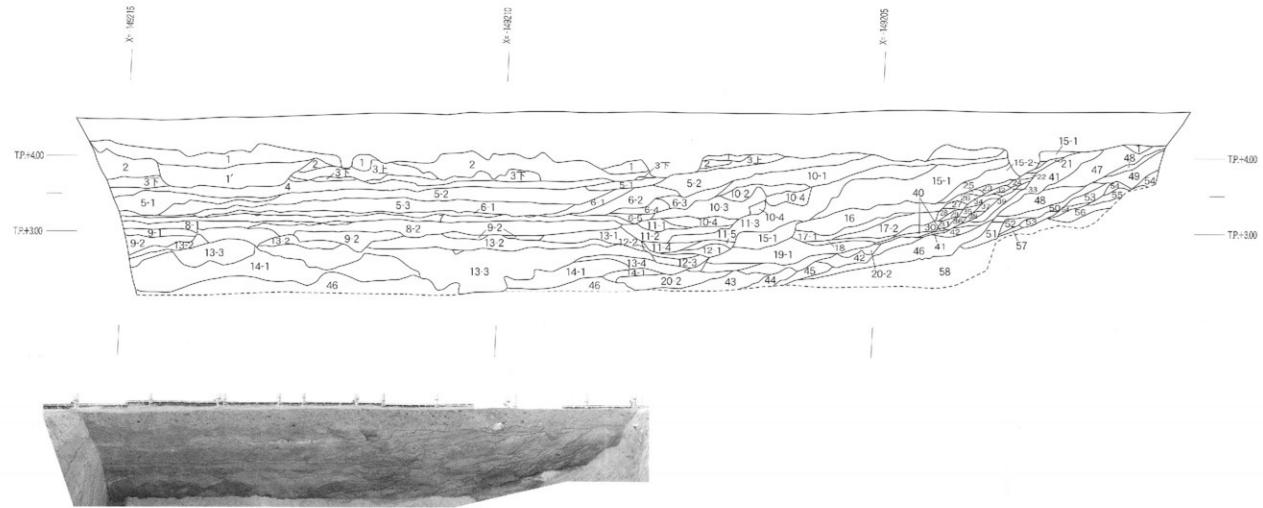
塙1 堆積層 (14層)

灰白色砂・灰色粘土ブロック含む緑灰色粘土など。須恵器、土師器、瓦などが出土。



A 2 灰色 (7.5Y6/1)・青灰色 (2.5Y5/1) 砂混じりシルト質土
A-3 灰オリーブ灰色 (5Y4/1) 砂混じり土
A-4 褐色 (7.5Y4/4)・オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘土質シルト
堆積 2 明黄褐色 (10YR6/6) 中・細粒砂 第4 遺構面

第4図 N地区南断面実測図



1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂混じり土
1' 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂混じリシルト質土
2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂混じリシルト質土
3 上 黄褐色 (2.5YR5/3) シルト質粘土ぬけ
3 下 黄褐色 (2.5YR5/3) 砂混じリシルト質土
4 砂混じリシルト質土
4' 灰褐色 (10YR4/1) 砂混じリシルト質土
5 灰褐色 (10YR4/2) 砂混じリシルト質土
5' 灰褐色 (2.5Y5/2) 砂混じリシルト
5.3 黄褐色 (10YR4/4) 砂混じリシルト
6.1 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂混じり土
6.2 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂混じりの質土
6.3 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂混じリシルト質土
6.4 にぶい褐色 (7.5YR5/0) 砂混じリシルト質土
6.5 灰色 (5Y6/1) 砂・シルト質土
7 黄褐色 (2.5Y6/0) 砂混じリシルト質土
上層にぶい黄褐色 (10YR7/3) 砂混じリシルト質土
8.1 深色 (7.5Y5/1) シルト質土
8.2 灰色 (5Y6/1) 砂混じリシルト質土
9.1 灰褐色 (5G6/1) 砂混じリシルト質土

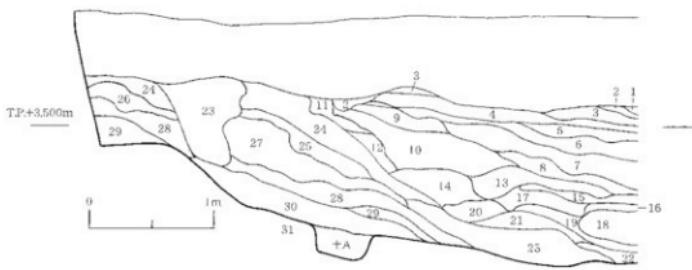
9.2 オリーブ灰褐色 (5GY6/1) 砂混じリシルト質土
10.1 にぶい褐色 (7.5YR5/1) 砂混じリシルト質土
10.2 灰色 (5Y5/1) 砂混じリシルト質土
10.3 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂混じリシルト質土
10.4 にぶい褐色 (7.5YR5/1) 砂混じリシルト質土
11.1 オリーブ灰褐色 (2.5GY6/1) 砂混じリシルト質土
11.2 にぶい褐色 (10YR5/3) 砂混じリシルト質土
11.3 にぶい褐色 (2.5YR5/3) 砂混じリシルト質土
11.4 黄褐色 (10YR5/2) 砂・シルト
11.5 灰灰色 (10YR6/1) の混じリシルト質土
11.6 にぶい褐色 (2.5Y6/1) 砂混じリシルト質土
12.1 青灰褐色 (5B6/5/1) 砂混じリシルト質土
12.2 黄褐色 (2.5Y5/1) 砂混じリシルト質土
12.3 黄褐色 (10YR4/2) 小混じリシルト・砂
13.1 黄色 (2.5YR4/2) 砂混じリシルト質土
13.2 厚土 (10Y6/1) 砂混じリシルト質土
13.3 黄色 (5Y6/1) オリーブ灰褐色 (2.5YR4/2) 砂混じリシルト質土
13.4 灰色 (7.5Y6/1) 砂混じリシルト質土
20-1 にぶい褐色 (2.5Y6/4) シルト質粘土
20-2 黄褐色 (2.5Y6/1) シルト質粘土
21 にぶい褐色 (2.5Y6/1) 砂
14-1 灰色 (5Y6/1) 砂混じリシルト質土

14 黄褐色 (2.5Y6/1) 砂 灰色 (7.5Y5/1) 砂土ブロック含む
14.2 灰色 (2.5Y7/1) 砂
15 にぶい褐色 (2.5YR5/3) 砂混じリシルト質土
15-1 にぶい褐色 (2.5YR5/3) 砂混じリシルト質土
16 にぶい褐色 (2.5YR5/4) 砂混じリシルト質土
16.2 にぶい褐色 (10YR6/4) 砂混じリシルト
16.3 にぶい褐色 (2.5YR5/4) 砂混じリシルト
16.4 にぶい褐色 (2.5YR5/4) 砂混じリシルト質土
17 にぶい褐色 (2.5Y6/2) 砂混じリシルト質土
17.2 灰褐色 (2.5Y5/2) 砂混じリシルト質土
18 灰褐色 (10YR6/2) シルト質粘土ブロック含む
18.1 にぶい褐色 (2.5Y6/6) シルト質粘土 灰色 (2.5Y6/2) 砂
19 灰褐色 (2.5Y5/2) 砂混じリシルト質土 灰色 (5Y5/1) 人込ブロック含む
20-1 にぶい褐色 (2.5Y6/4) シルト質粘土
20-2 黄褐色 (2.5Y6/1) シルト質粘土
21 にぶい褐色 (2.5Y6/1) 砂
21.1 黄褐色 (2.5Y6/1) 砂混じリシルト質土
21.2 黄褐色 (2.5Y6/1) 砂
21.3 黄褐色 (2.5Y6/1) 砂混じリシルト質土
21.4 黄褐色 (2.5Y6/1) 砂土ブロック含む

22 灰褐色 (2.5Y5/2) 砂混じリシルト質土
23 黄褐色 (10YR5/2) 砂混じリシルト質土
24 灰褐色 (10YR6/1) 砂混じリシルト
25 黄褐色 (2.5Y5/1) 砂・シルト
26 黄褐色 (2.5Y5/1) 砂
27 にぶい褐色 (2.5Y6/4) 砂混じリシルト質土
28 にぶい褐色 (10YR6/4) 砂混じリシルト
29 オリーブ色 (5Y6/2) 砂混じリシルト
30 灰褐色 (10YR6/2) 砂混じリシルト
31 灰褐色 (2.5Y6/2) 砂混じリシルト
32 黄褐色 (2.5Y5/2) 砂混じリシルト
33 オリーブ色 (5Y6/2) 砂混じリシルト
34 にぶい褐色 (2.5Y6/3) 砂混じリシルト
35 黄褐色 (2.5Y5/2) 砂混じリシルト
36 にぶい褐色 (2.5Y6/2) 砂混じリシルト質土
37 灰褐色 (2.5Y6/2) 砂混じリシルト
38 淡黄色 (2.5Y7/3) シルト質土
39 灰色 (5Y6/1) 砂混じリシルト
40 灰褐色 (2.5Y6/1) 砂混じリシルト
41 にぶい褐色 (10YR6/4) 砂混じリシルト質土

42 オリーブ黄色 (5GY6/3) 砂混じリシルト土
43 黄色 (2.5Y7/3) 砂
44 粉青灰褐色 (5BG4/1) シルト質粘土
45 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 砂
46 灰色 (10Y6/7) 砂混じリシルト質土
47 にぶい褐色 (2.5Y6/3) 砂混じリシルト質土
48 にぶい褐色 (2.5YR5/3) 砂混じリシルト質土
49 表灰褐色 (2.5Y5/1) 砂混じリシルト
50 にぶい褐色 (10YR6/4) 砂混じリシルト質土
51 灰褐色 (10YR6/2) 砂混じリ
52 オリーブ色 (5Y6/1) 砂混じリシルト
53 にぶい褐色 (2.5Y6/4) 砂混じリシルト
54 黄褐色 (2.5Y6/1) 砂混じリシルト質土
55 灰オリーブ色 (5Y6/2) 砂混じリシルト質土
56 にぶい褐色 (10YR6/3) 砂混じリシルト
57 灰褐色 (10G7/1) シルト質土
58 灰褐色 (10YR6/6) - 灰褐色 (10YR6/2) 灰・細粒沙

第5図 S地区西断面写真および実測図



- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂礫混じり砂質土
2 黄褐色土 (10YR5/2) 砂混じりシルト質土
3 黄褐色土
4 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 砂混じりシルト 黄褐色
(2.5Y5/1) 土上ブロック含む
5 にぶい黄褐色 (2.5Y5/4) 砂混じりシルト質土
6 にぶい黄褐色 (2.5Y5/6) 土上ブロック含む
7 にぶい黄褐色 (2.5Y5/8) 土上ブロック含む
8 明黄色 (2.5Y6/3) シルト質粘土・灰土
9 明黄色 (2.5Y6/6) 土上
10 にぶい黄褐色 (2.5Y6/13) 砂・灰土質 (2.5Y6/1) 質
11 砂質土 (2.5Y7/2) 砂混じりシルト質土
12 砂質土 (10Y5/2) 砂混じりシルト質土
13 黄褐色 (10Y6/1) 砂混じりシルト
14 黄褐色 (2.5Y6/1) 砂・シルト
15 にぶい黄褐色 (10Y6/1) 砂混じりシルト質土
16 にぶい黄褐色 (10Y6/1) 砂混じりシルト質土
17 砂質土 (10Y6/6) 砂混じりシルト
18 明黄色土 (10G7/1) 砂混じりシルト質土
19 黄褐色土 (10G6/1) 砂混じりシルト質土
20 にぶい黄色 (2.5y6/4) 砂混じりシルト質土
21 にぶい黄色 (10Y6/4) 砂混じり土質シルト
22 明黄色 (5B7/1) 砂混じり粘土質シルト
23 暗オーラーブ色 (2.5G7/4)・暗灰色 (10G5/1)
砂混じり粘土質シルト
24 明黄色 (2.5Y7/1) 砂混じりシルト質土
25 にぶい褐色 (7.5T8/7/4) 砂混じり粘土質シルト
26 暗黄色 (7.5Y8/6/4) 砂混じりシルト質土
27 明黄色 (7.5Y8/7/6) 砂混じりシルト質土
28 明黄色 (7.5Y8/7/1) 砂混じりシルト質土
29 にぶい黄褐色 (10Y8/7/4) 砂混じりシルト質土
30 明黄色 (10G7/7/1) 砂混じりシルト質土
31 明黄色 (10Y8/6/6) 砂・粘土
32 暗灰色 (10Y8/5/2) 砂混じりシルト質土

第6図 SW地区東断面(部分ー北側ー) 実測図

堀1形成層(15~18, 21~41層) 第3遭構検出面。

にぶい黄褐色砂混じり粘土質シルトなど。土師器、瓦、瓦器などが出土。

堀2埋土層(N地区 堀2 1~4層)

にぶい黄褐色中・細粒砂混じりシルト質粘土、灰黄褐色砂混じり粘土質上、暗灰黄色砂礫混じり土など。土師器、瓦、瓦器などが出土。

堀2堆積層(N地区 堀2 5~6層)

灰色粘土ブロック含む綠灰色粘土など。土師器、瓦などが出土。

堀2形成層(N地区 整地土1) 第4遭構検出面。

灰黄褐色砂混じり粘土質土、暗灰黄色砂礫混じり土など。土師器、瓦器などが出土。

堀3埋土層(19~20・42層)

にぶい黄褐色中・細粒砂混じりシルト質粘土など。土師器、瓦、瓦器などが出土。

堀3堆積層(43~46層)

黄灰色砂・灰色粘土ブロック含む綠灰色粘土など。上師器、瓦、瓦器、須恵器などが出土。

溝3形成層(47~56層、N地区 整地上2・3) 第5遭構検出面。

灰黄褐色粗→細粒砂混じり粘土質シルト、にぶい黄褐色砂混じり粘土質など。土師器、瓦器、瓦、須恵器、陶器、製塙土器などが出土。

溝A埋土層(N地区 溝A 1・2層)

にぶい黄褐色砂混じりシルト質土、暗灰黄色砂礫混じり土など。土師器、瓦器などが出土。

溝A堆積層(N地区 溝A 3・4層)

暗オーラーブ灰色砂混じり粘土、綠灰色粘土など。土師器などが出土。

溝A形成層(57・58層、N地区堆積2) 第6遭構検出面。

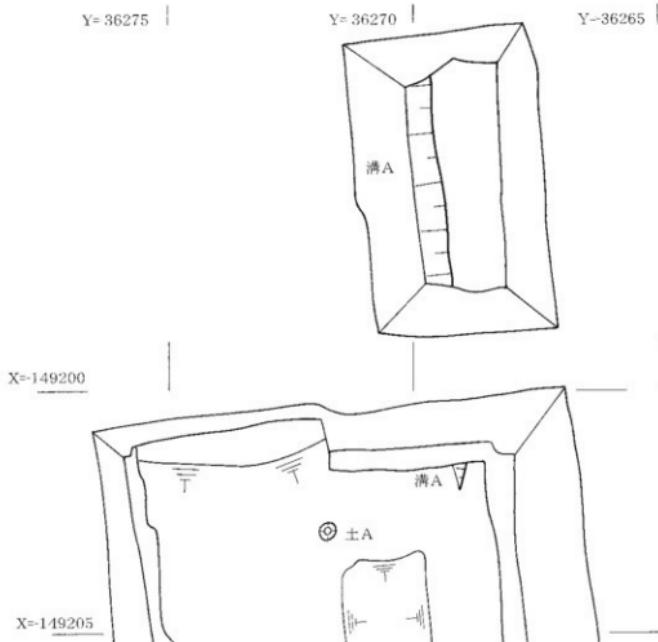
暗灰黄色砂礫混じり土、灰黄褐色砂混じり粘土質土など。土師器、瓦器、瓦などが出土。

3. 造構

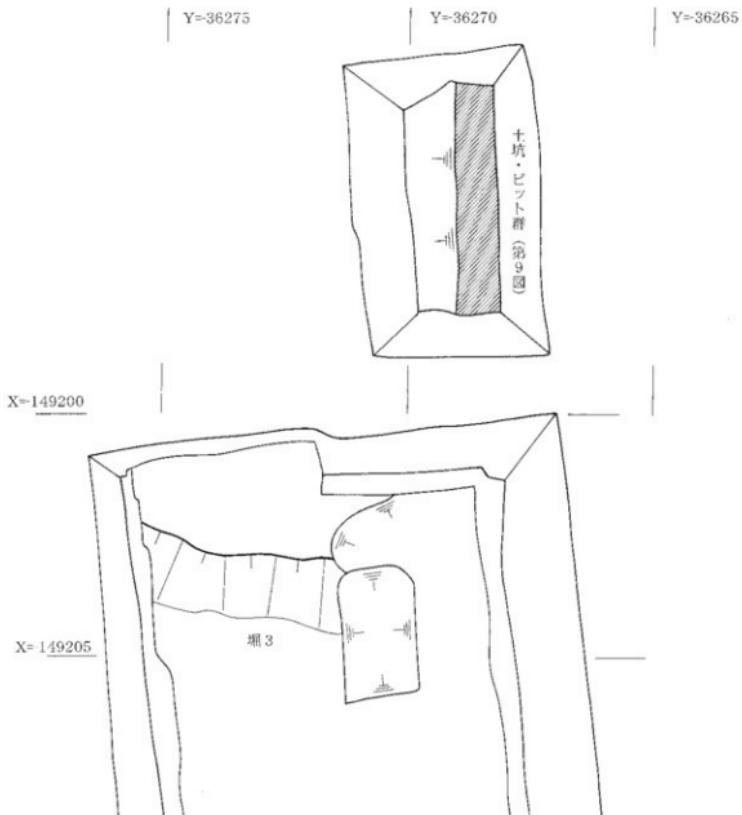
造構の記述にあたっては、上記したように調査は S E 地区と N 地区、その後に S W 地区を実施したが、S E ・ S W 地区は一連のものであることから S 地区とし（必要に応じ、S E ・ S W を明記することとする）、検出造構面ごとに S ・ N 地区を合わせて記す。造構はピット、土坑、溝、堀があったが、調査時の番号を優先して記すことから、ピットは S 地区では P 1 、 P 2 など、N 地区では p 1 、 p 2 など、土坑は S 地区では土 1 、土 2 など、N 地区では土坑 1 、土坑 2 などと記していく。

第6造構（第7図）

N 地区で南北方向溝の東肩、S 地区で南北方向の東肩の一部を検出した=溝 A 。 N 地区および S 地区では明黄褐色中・細粒砂上面で確認したが、溝の西肩および南部は第5造構以後の整地などによつて削られ不明である。残存高は 0.1 ~ 0.25m を測った。N 地区では 2 層の埋土 - 上層に黄橙色・灰黃褐色粘土質シルトのある灰黄色・褐色砂混じりシルト質土、灰色・黄褐色砂混じりシルト質砂 - と 2 層の堆積肩 - 暗オリーブ灰色砂混じり粘土、褐色・オリーブ灰色粘土質シルトを検出し、土器・瓦器・瓦などが出土した。検出幅は 0.9m を測るが、西肩は調査地外である。この溝は第10次調査で西肩が見られた溝 5 に対応すると考えられ、平安時代後期の集落に伴うものと思われる。また、第5造構によって上部が削平・搅乱された土坑（土 A ）があり一検出面で径 0.3m 、深さ 0.15m 、埋土は褐色砂混じりシルト質土で、その中から瓦器碗・皿（88~97）が出土した。



第7図 第6造構平面実測図

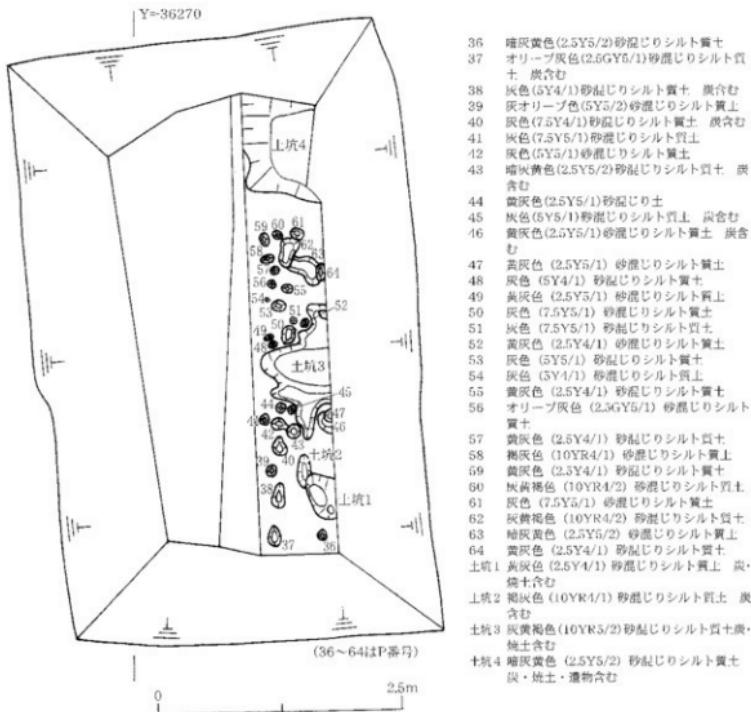


第8図 第5遺構平面実測図

第5遺構（第8・9図）

S地区北部からN地区にかけて明オリーブ灰色・緑灰色砂混じり粘土質シルトおよび浅黄褐色砂混じりシルト質粘土・にぶい橙色砂礫混じり粘土質シルトなどによる整地が行なわれ、S地区北部ではこの整地上により肩をなす堀（堀3）、N地区では土坑およびヒット群が見られ建物などを構築していたと考えられる。

堀3は、北西から東方向に延びているが、確認トレーニングを挟み東側は第4遺構の堀2によって破損し不明である。堀の検出幅は13m以上、深さ2m以上を測る。整地土（堀肩）内からは陶器、瓦器、土師器、須恵器、瓦などが出土した。埋土は灰黄色・褐灰色砂混じりシルト質土、黄褐色・灰黄褐色粘土質シルト、灰色・黄褐色砂混じりシルト質砂などで土師器、瓦器、瓦などが出土した。堆積土は、暗オリーブ灰色砂混じり粘土、褐色・オリーブ灰色粘土質シルト、灰色砂混じりシルト質粘土黄灰色砂、灰色粘土ブロック含むなどで、土師器、瓦などが出土した。



第9図 第5遺構N地区平面実測図

N地区では、第4遺構の南北方向の堀2によって削られ、東側のみで土坑4基（上坑1～4）とピット29個（p36～64）を検出した。これらの遺構を形成している整地上2・3内からは、胸器描鉢（149）、瓦器羽釜（150）、深鉢（151）、土師器羽釜（152）・皿（153・154）、須恵器杯（155）、製塙土器（157）、五重孤文軒平瓦（159）をはじめ多くの遺物が出土した。

土坑1埋土は、炭・焼土含む黄灰色砂混じりシルト質土。

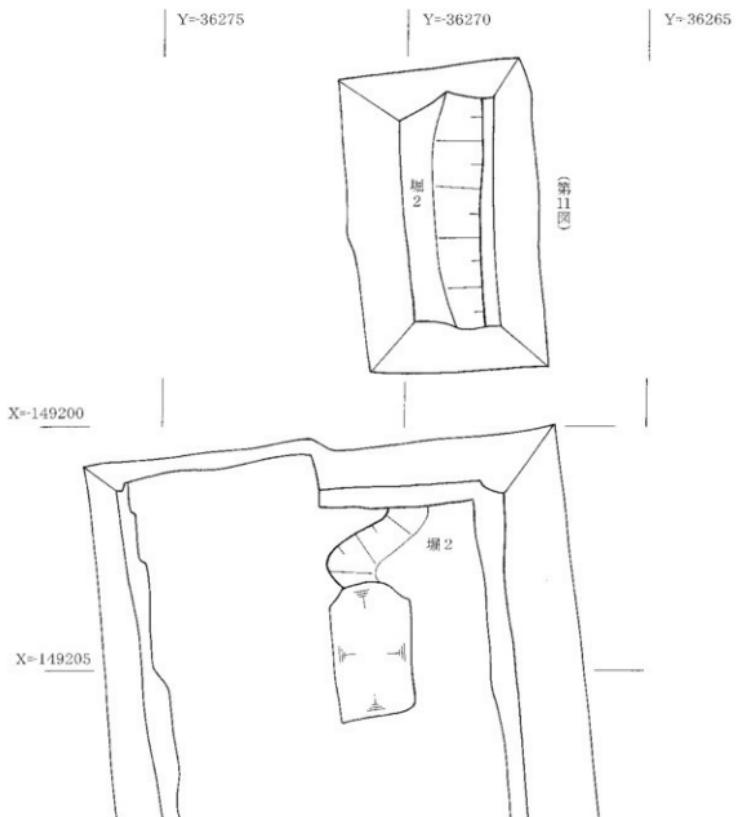
土坑2埋土は、炭含む褐灰色砂混じりシルト質土。

上坑3埋土は、炭・焼土含む灰黃褐色砂混じりシルト質土で、須恵器高杯（127）をはじめ土師器などの破片が出土した。

土坑4埋土は、炭・焼土含む暗灰黄色砂混じりシルト質土で、青磁（128）、土師器皿（129・130～134）、瓦器描鉢（135）、羽釜（136・137）・壺（138）、巴文軒丸瓦（162）などが出土した。

ピット群は、長軸長25～15cm、深さ10cmの橿円状のやや大きなもの（p37・38・40・50・63・64）と径10cm前後、深さ7cmの小さなもの（p36・39など）があった。

整地・遺構内からは古墳時代から室町時代にわたる遺物が出土したが、形成の時期は16世紀はじめごろと考えられる。

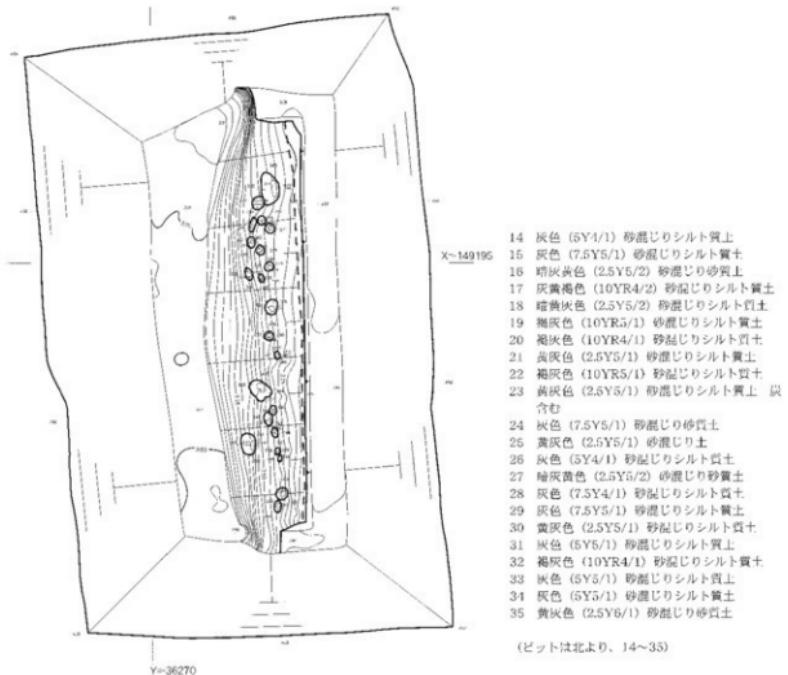


第10図 第4造構平面実測図

第4造構(第10・11図)

N地区で南北方向、S E地区で南西方向へ延びる堀(堀2)を検出し、この時期、南北方向から南西に向う堀が掘られた。N地区ではほぼ南北方向の東側・東肩斜面を、S E地区では北から南西方向におれる西肩の一部を確認した。東角は調査地外であり、西方および南方側は第3造構の堀1によつて削られていた。

N地区では第5造構形成土(整地土2)の上に炭を含む灰褐色・黒褐色砂混じり粘土質シルト(整地土1)があり一偏行唐草文軒平瓦(160)や土師器片などを包含し、それから切り込んだ形で堀が造られていた。検出の幅1.55m、深さ0.8mを測る。埋土は灰黄褐色砂混じり土、にぶい黄褐色砂混じり砂質土、灰褐色・灰色小疊・砂混じりシルト、暗灰黄色砂混じりシルト質土、灰褐色砂混じり土、にぶい黄褐色砂混じりシルト、にぶい黄褐色粗~細粒砂含むの6層に分かれ、瓦器植鉢(124・125)、土師器杯(126)、製塙上器(158)をはじめ瓦器・土師器などの小片などが出土した。肩の斜面には



第11図 第4造構N地区平面実測図

径35~7cm、深さは10~7cmのビットが22個見られた(p14~35)。ビットは垂直または斜めになつておらず、杭が打ち込まれていたものと思われる。

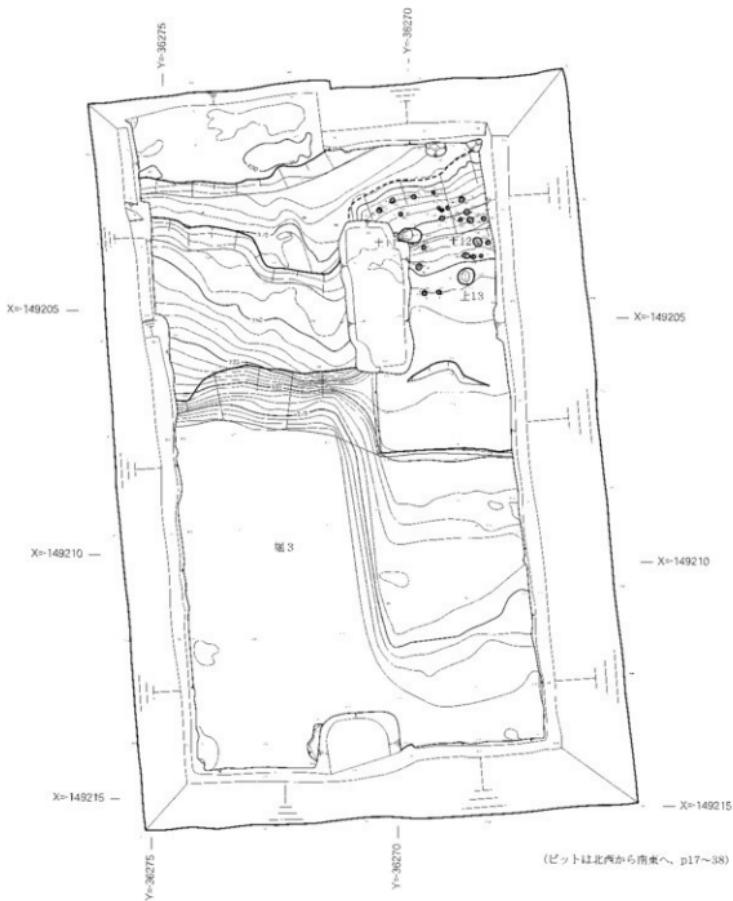
S E地区で南西方向へと延びる西肩を確認した堀2は堀1によって削られ、その東・西・南方側は不明である。肩斜面はN地区東肩に比してやや緩やかで、ビットは検出されなかった。検出した幅は2.4~4.2m、深さ0.7mであった。

N地区東肩に対応する西肩は調査地外であるが、S地区北端状況から、本来の南北方向の幅は2.5m以上を測ると思われる。整地上・造構内からは古墳時代から室町時代にわたる遺物が出土したが、形成時期は16世紀中ごろと考えられる。

第3造構(第12図)

S地区において東西方向の堀の北部と北肩を検出した。後述するように肩斜面から底部にかけては2~3段の段をなしていた。肩部は灰黄褐色砂混じりシルト質土、褐色砂混じりシルト、黄灰色砂・シルト、灰色砂混じりシルト質粘土などで形成され、庄内式壺(68)、布留式壺(69)、須恵器杯(70・71)・捏鉢(72)、陶器捏鉢(73)、土師器皿(74~80)、瓦器楕(81・82)・插鉢(83)・羽釜(84・85)・甕(86)・深鉢(87)、巴文軒丸瓦(117・120)、鞆の羽口(114)と、多くの土師器・瓦片などの遺物が出土した。

西側は2段に落ちる。1段目は東側では北へ入り込むとともにややゆるやかな傾斜をなし、3基の

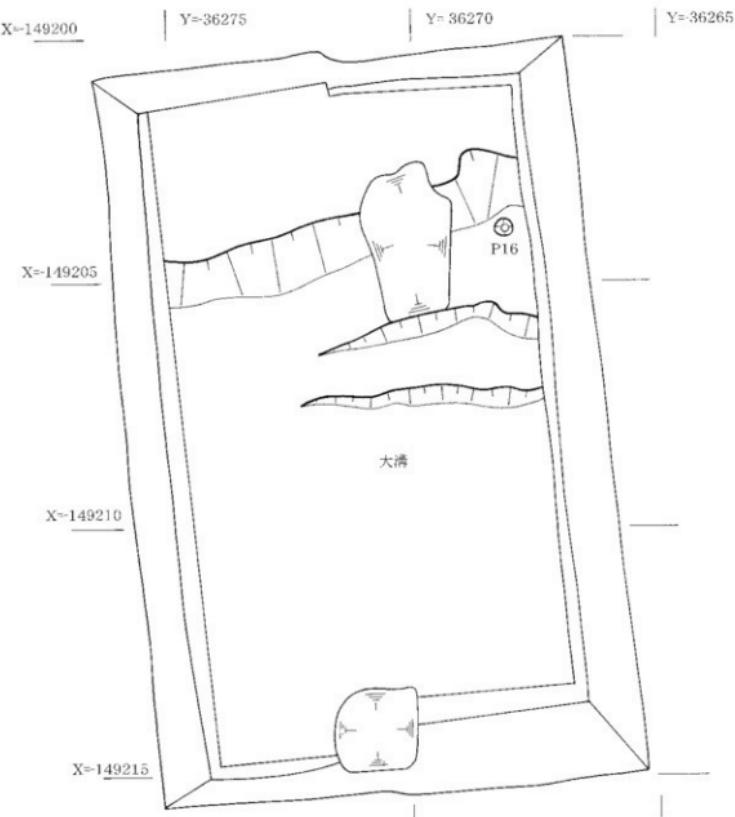


第12図 第3塁横平面実測図

土坑（上11～13）とともに径5～3cmのピット群が見られた。ピットは22個あり（P17～38）、垂直または斜めであった。埋上は、土11—灰色（7.5Y5/1）砂混じり粘土質シルト、土12—にぶい黄褐色（10YR5/3）砂混じりシルト質土、土13—暗灰黄色（2.5Y5/2）砂混じり砂質土で、ピット群は灰白色（5Y7/2）シルト質砂であり杭が打たれていたと思われる。西側2段目はやや急傾斜をなして底面まで達していたが、南東部は一段高く、緩やかに傾斜する面をなしていた。

塙の埋土は、にぶい黄褐色砂混じりシルト質土、灰褐色粘土質シルト、黒褐色砂混じりシルト質粘土、にぶい褐色砂混じりシルト質土など、堆積土は、灰色砂混じりシルト質粘土、灰白色砂・灰色粘土ブロック含む緑灰色粘土であった。塙内からは須恵器杯蓋（1）、土師器皿（2～4）とともに土師器、瓦器、瓦などの遺物が多く出土した。

出土遺物などからこの塙の形成・活用時期は、安土桃山時代ごろと思われる。

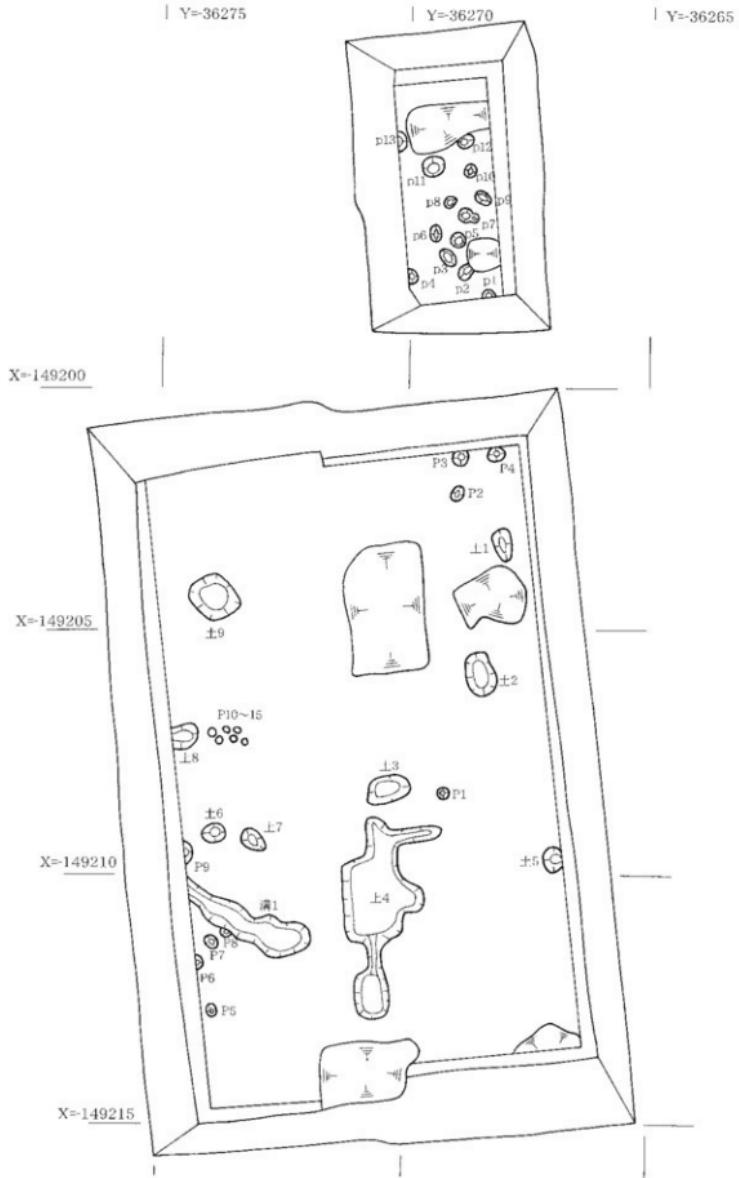


第13図 第2造構平面実測図

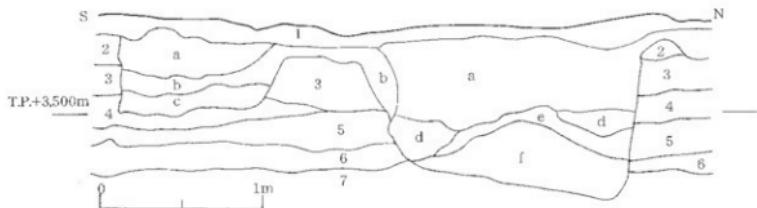
第2造構（第13図）

城が廃絶したおり、主要な堀は埋められ、多量の建物資材（壁・礎石・多量の瓦など）などによつて埋没した箇所もあった（第24・27・38次調査地など）。それに対し、当該地の東西方向の堀は底が埋められて浅くなつたものの、大溝として江戸時代になつても活用されていた。S地区北部およびN地区では造構は検出されなかつた。

大溝底部北側は、東に顕著な2段の段を有し、肩近くに1つのピット（P 16）一径12cm、深さ4cm、埋土：灰白色（10YR 7/1）シルト・中粒砂砂混じりシルト質土を検出したが、西側は段がなく、ゆるやかな傾斜をなしていた。検出の幅15.3m、深さ0.8mを測る。埋土は大きく3層に分かれ、上から褐灰色砂混じり土、褐色砂混じり土・にぶい黄褐色砂疊混じり粘質土、にぶい黄褐色砂疊混じり土・砂疊混じり砂質土、灰黄褐色砂疊混じりシルト質土などで、堆積土は、にぶい黄灰色砂混じりシルト質土、灰色シルト質粘土・砂混じり粘土質シルト、暗緑灰色砂混じりシルト質粘土、オリーブ灰色砂



第14図 第1道構平面実測図



S地区 土4

a にぶい黄色(2.5Y6/3)小礫～砂混じり土
b にぶい黄褐色(10YR6/3) 小礫～砂混じりシルト質土
c 青灰色(5BG5/1) 砂混じり粘土質シルト

d 灰色(7.5Y4/1) 小礫～砂混じりシルト質土
e 灰オーブ色(5Y5/2) 砂混じり土
f 黄褐色(2.5Y5/3) 小礫～砂混じりシルト質土

第15図 土4西断面実測図

砾混じりシルト質土、灰色砂混じり粘土質などであった。

この埋土・堆積土からは、弥生土器壺(6・7)・底(8)、庄内式土器壺(9・10)、布留式土器壺(11)、須恵器杯壺(12・13)・杯底(14・15)・壺底(16)・甕(17)・捏鉢(18)、陶器擂鉢(19・20)、白磁碗(21)、青磁碗(22)・皿(23)、瓦器碗(24~28)・刃釜(30~37)・擂鉢(38~40)、黒色土器碗(29)、土師器高杯(41)・杯(42・64)・壺(43・44)・皿(45~63)・羽釜(65・66)、製塙土器(99・101・104)、素弁蓮華文軒丸瓦(115)、複弁蓮華文軒丸瓦(116)、巴文軒丸瓦(119)、偏行唐草文軒平瓦(121・122)、唐草文軒平瓦(123)、平瓦(107・109・111~113)、滑石製筋錘車(98)など多量の遺物が出土した。この大溝は江戸時代前半まで活用されていたが、中ごろには埋没したようである。

第1遺構 (第14・15図)

第2・3層上面で検出した。S地区では土坑9基(上1~9)、溝1条(溝1)、ピット15個(P1~15)。N地区ではピット13個(p1~13)。

S地区 P10~15は径5cm、深さ4~6cmで、埋土は灰色(7.5Y5/1)シルト質砂であった。

N地区 p1~11およびS地区北部のP2~4は径15~25cm、深さ5~10cmで、埋土はp1~4は灰褐色(10YR5/1)砂混じり土、p2~4~11とP3~4~5は灰黄褐色(10YR5/2)砂混じり土、p3~5~6~10~12は灰黄褐色(10YR4/2)砂混じり土、p7~8は暗灰黄色(2.5Y4/2)砂混じり土、p8~9は灰オーブ色(7.5Y4/2)砂混じり土、p9~10は灰色(7.5Y4/1)砂混じり土、P2~4はにぶい黄褐色(10YR5/3)砂混じり砂質土で、建物に伴うものと思われ、建物状況は不明であるがこの周辺に建物が存したものと考えられる。土1は埋土がにぶい黄褐色(10YR5/3)小礫・砂混じり砂質土で、土師器皿(5)などが出土した。土2は埋土が灰オーブ色(5Y5/2)砂混じり砂質土、土3は埋土が灰黄褐色(10YR5/2)砂混じり砂質土で土師器皿が出土した。土4は南北に並ぶ大小2つの方形土坑を連結したもので、北土坑は南北1.7m、東西1.6m、深さ0.95m、南土坑は南北1m、東西0.65m、深さ0.46mを測る。南土坑の最下層は暗青灰色砂混じり粘土質シルトで、活用時には淀んだ状態であったと思われる。磁器・土師器などの小・細片が出土したが、性格は不明。土5は埋土が灰色(5Y6/1)砂混じり砂質土で土師器皿などが出土した。土6は埋土が灰褐色(5YR5/2)砂混じり砂質土、土7は埋土がにぶい黄褐色(10YR5/3)小礫・砂混じり砂質土、土8・土9は埋土が灰オーブ色(5Y5/2)砂混じり砂質土、溝1は埋土が灰黄褐色(10YR5/2)砂混じり砂質土であった。これらの遺構は江戸時代中~後期のものである。

4. 出土遺物

弥生土器、布留式土器、奈良～平安時代の土器、中世～近世期の土器、製塙土器、埴輪、石器、土製品、瓦などが出土した。本文中に調整法を記しているが口縁部のヨコナデ調整は普遍的なのであえて記さない。土器は各地区の遺構・遺物包含層に分けて説明を記す。

S地区

遺構出土の土器

堀1（第16図 1～4）

須恵器と土師器がある。須恵器は蓋、土師器は皿の器種がある。

1は須恵器の蓋である。体部はゆるく立ち上がり、天井部は低い。口縁部はゆるく外反し、口縁端部を擒み上げる。体部内外面は回転ナデ調整する。時期は8世紀である。

2～4は土師器の皿である。2は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はナデ調整する。3は丸底に近い平底の底部より体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。4は体部が外上方へ伸び、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はナデ調整する。時期は2が13世紀後半、3が15世紀後半～16世紀初め、4が8世紀後半である。

上1（第16図 5）

5は土師器の皿である。丸底に近い平底の底部より体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。時期は15世紀後半～16世紀初めである。

遺物包含層出土の土器

第1～9層（第17～19図 6～66）

弥生土器、庄内式土器、布留式土器、須恵器、陶器、輸入磁器、瓦器、黒色土器、土師器がある。

6～8は弥生土器である。6・7は蓋である。6は口縁端部を下方へ拡張する。口縁端部に4条の擬凹線文を施す。7は頸部が外上方へ伸び、口縁端部が面を持つ。頸部内外面はナデ調整する。8は平底を呈する底部である。体部の立ち上がりは急である。体部外面はタタキ調整、内面はナデ調整する。時期は後期である。

9・10は庄内式土器の蓋である。口縁部は強く外反し、口縁端部を上方へ擒み上げ気味に拡張する。内面は口縁部と体部の境に鋭い稜がある。体部内面はヘラケズリ調整する。時期は庄内期である。

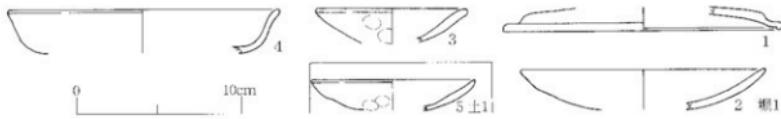
11は布留式土器の蓋である。体部の張りは大きく、口縁部が内湾気味に外反する。口縁端部は面を持つ。体部外面はナデ調整、内面はヘラケズリ調整する。時期は布留期である。

須恵器は蓋・杯・壺・甕・捏鉢の器種がある。

12・13は蓋である。12は天井部が丸く、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面は回転ナデ調整する。13は体部がゆるく立ち上がり、天井部は低い。口縁部はゆるく外反し、口縁端部をやや擒み上げる。体部内外面は回転ナデ調整する。時期は12が6世紀後半～7世紀初め、13が8世紀である。

14・15は杯の底部である。底部は平底を呈し、断面形が逆台形を呈する高台を貼り付ける。体部は外上方へ伸びる。内外面は回転ナデ調整する。時期は8～9世紀である。

16は甕の底部である。底部は平底を呈し、断面形が逆台形を呈する高台を貼り付ける。体部は大きく外上方へ伸びる。内外面は回転ナデ調整する。時期は8世紀である。



第16図 S地区堀1・土1出土土器実測図

17は甕である。口縁部がゆるく外反し、口縁端部は外側へやや肥厚する。時期は7世紀後半である。
18は捏鉢である。束縛系である。体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は上方へ拡張し、面を持つ。体部内外面はロクロナデ調整する。時期は13世紀である。

19・20は陶器の壺鉢である。備前焼である。体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は上方へ拡張し、幅広の面を持つ。体部内外面はロクロナデ調整する。内面におろし目が残る。時期は15世紀後半～16世紀前半である。

輸入磁器は白磁・青磁がある。白磁の椀、青磁の椀・皿の器種がある。

21は白磁の椀である。体部が外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は外側へやや肥厚する。所謂、正縁状口縁である。体部内外面はロクロナデ調整する。内外面に施釉し、色調が乳白色を呈する。時期は11世紀後半である。

22は青磁の椀である。体部が外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はロクロナデ調整する。口縁部外面に雷帯文を施す。内外面に施釉し、色調が濃緑色を呈する。時期は14世紀後半～15世紀初めである。

23は青磁の皿である。底部はやや凹む平底である。外面はロクロナデ調整する。見込み部に柳描青光文を施す。底部外面以外に施釉し、色調が淡緑色を呈する。時期は12世紀である。

瓦器は楕・羽釜・攝鉢の器種がある。

24～28は楕である。24・25は体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部は24が外上方へ伸び、25が外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整、内面はやや粗いヘラミガキ調整する。

26は体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部は外反し、口縁端部は丸く終わる。口縁端部の内面に沈線を巡らす。体部内外面はやや粗いヘラミガキ調整する。27・28は底部である。27は断面形が逆台形の高台を貼り付ける。体部内外面はやや粗いヘラミガキ調整する。28は断面形が逆三角形の高台を貼り付ける。見込み部に平行線の暗文を施す。時期は24が12世紀後半、25が12世紀中葉、26が12世紀前半、27が11世紀、28が12世紀である。

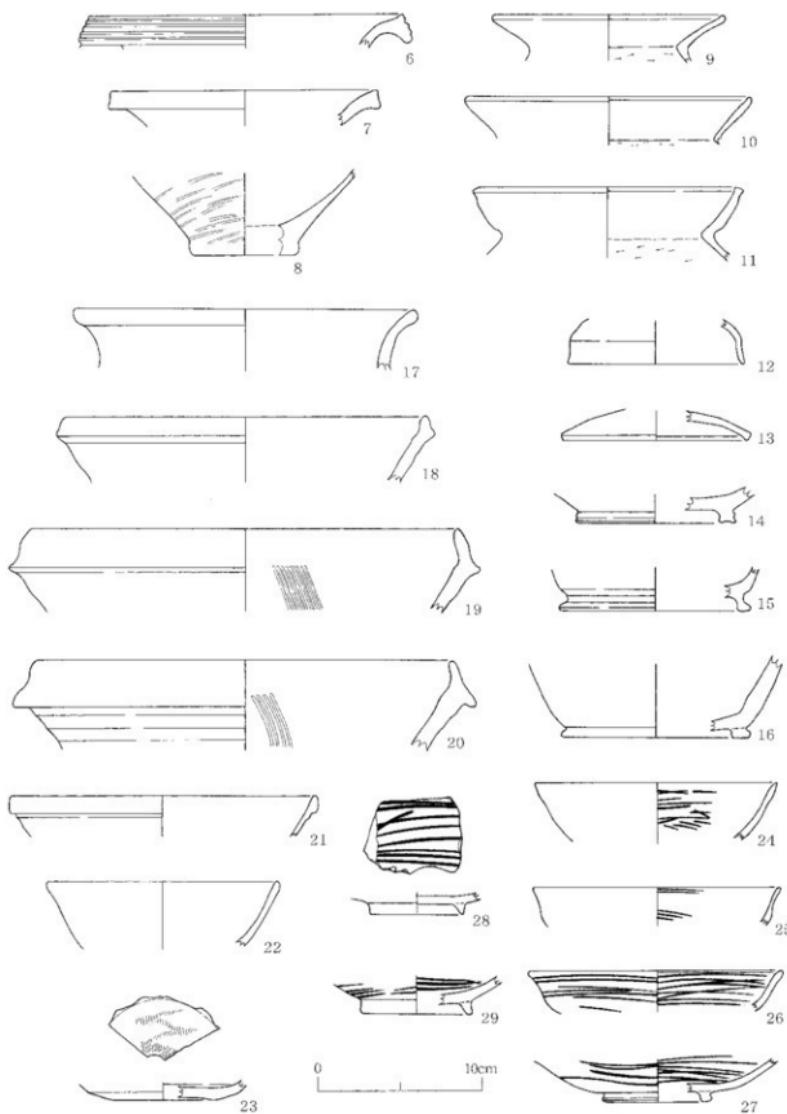
30～37は羽釜である。体部の張りは少なく、口縁部は内傾する。口縁端部は面を持つ。口縁部外面に2～3条のゆるい段が付く。鍔は外上方へ長く伸びる。体部外面はヘラケズリ調整、内面はハケメ調整する。時期は15世紀である。

38～40は攝鉢である。38・39は体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は幅広の面を持つ。体部外面はヘラケズリ調整、内面はナデ調整する。40は平底を呈する底部である。体部は外上方へ伸びる。体部内外面はナデ調整する。内面におろし目が残る。時期は15世紀である。

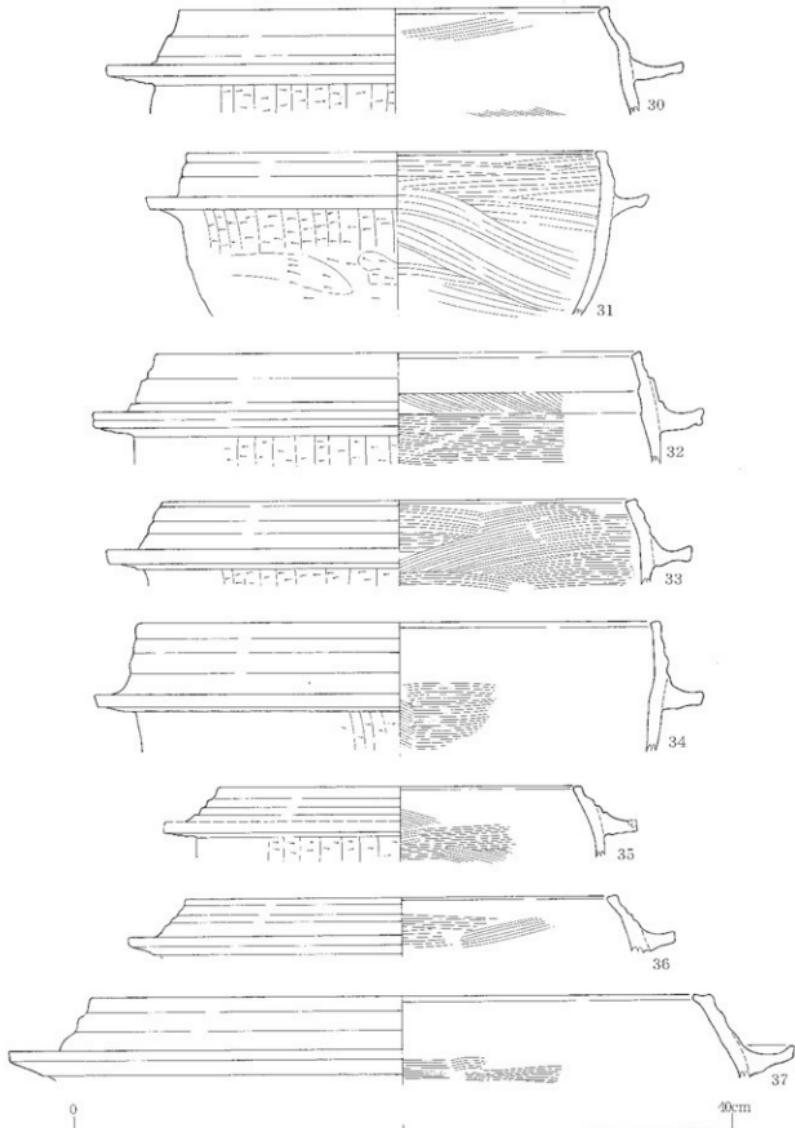
29は黒色土器の楕である。底部は平底を呈し、高い高台を貼り付ける。高台の断面形は逆台形を呈する。体部内外面はやや粗いヘラミガキ調整する。内外面の色調は黒色を呈する。時期は9世紀である。

土師器は高杯・杯・甕・皿・羽釜の器種がある。

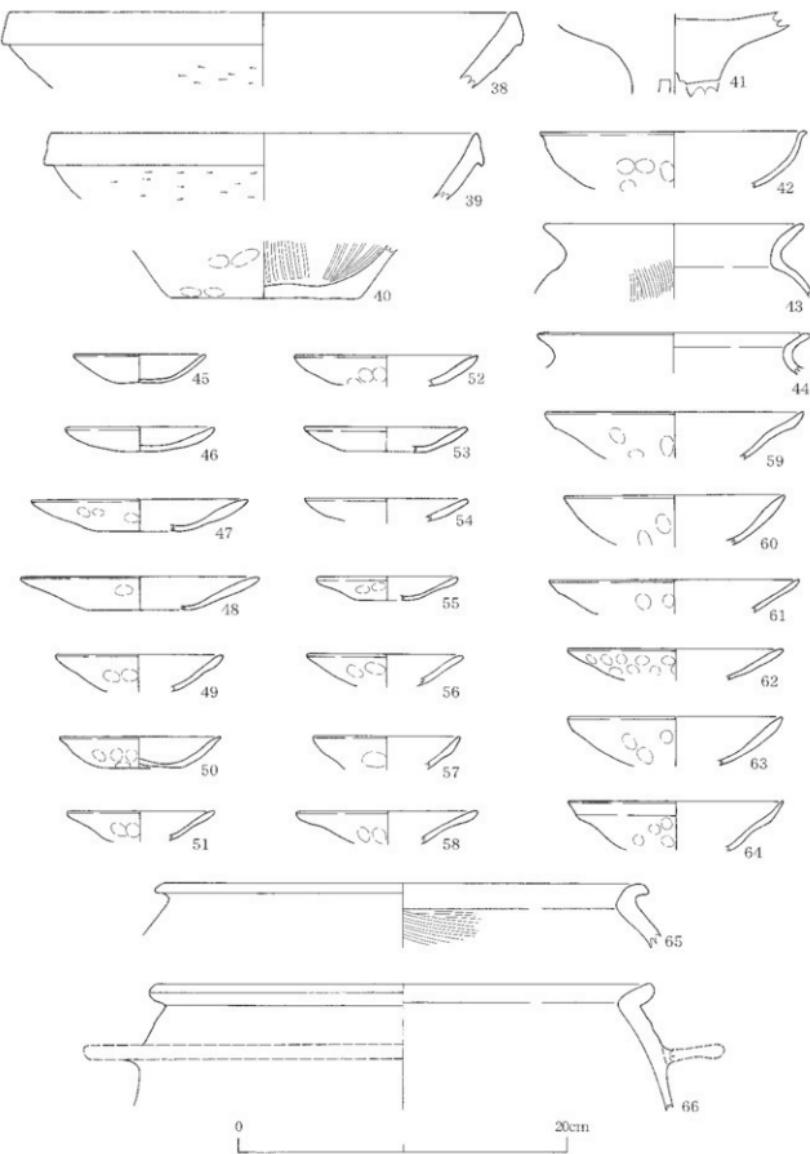
41は高杯である。柱状部の3ヶ所に透かし孔を施す。内外面はナデ調整する。時期は古墳時代である。



第17図 S地区第1～9層出土器実測図



第18図 S地区第1～9層出土上器実測図



第19図 S地区第1～9層出土上器実測図

42・64は杯である。42は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。64は体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。時期は10世紀である。

43・44は盃である。43は体部の張りが大きく、口縁部が強く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。44は口縁部が強く外反し、口縁端部が肥厚して面を持つ。体部外面はナデ調整する。時期は43が5世紀後半～6世紀初め、44が9世紀後半～10世紀である。

45～63は皿である。45・46は丸底に近い平底の底部より体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面はナデ調整する。47～63は丸底に近い平底の底部より体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。時期は45・46が13世紀後半、47～63が15世紀後半～16世紀初めである。

65・66は羽釜である。体部の張りは大きく、口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。65は体部外面をナデ調整、内面をハケメ調整する。66は体部外面をナデ調整する。時期は12世紀後半～13世紀初めである。

第12層（第20図 67）

67は瓦器の壺鉢である。体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は幅広の面を持つ。体部外面はヘラケズリ調整、内面はハケメ調整する。内面におろし目が残る。時期は15世紀である。

堀肩（第20図 68～87）

庄内式土器、布留式土器、須恵器、陶器、土師器、瓦器がある。

68は庄内式上器の甕である。口縁部は強く外反し、口縁端部を上方へ摘み上げ気味に拡張する。内面は口縁部と体部の境に鋸い稜がある。体部内面はヘラケズリ調整する。口縁部内面はヨコナデの後ハケメ調整する。時期は庄内期である。

69は布留式土器の甕である。体部の張りは大きく、口縁部が内湾気味に外反する。口縁端部は内側へ肥厚し面を持つ。体部外面はナデ調整、内面はヘラケズリ調整する。時期は布留期である。

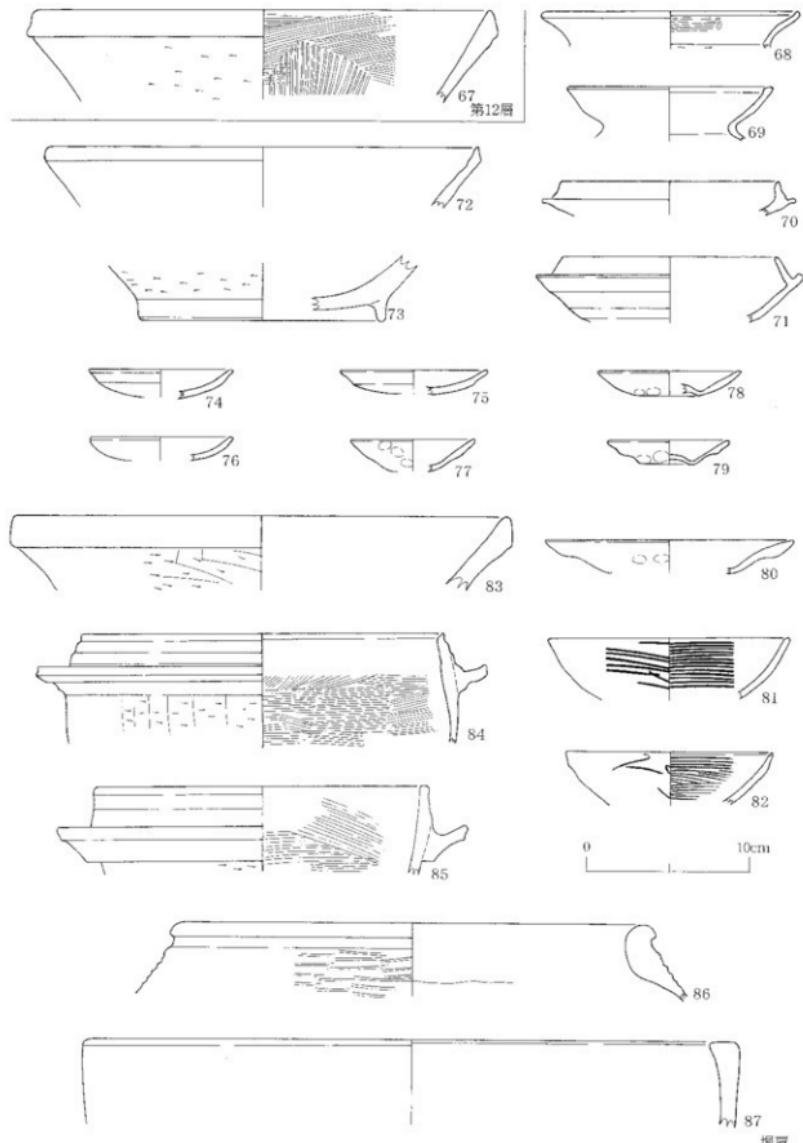
須恵器は杯・押鉢の器種がある。

70・71は杯である。70は体部が浅く、受け部が水平方向へ伸びる。立ち上がり部は短く外反する。口縁端部は尖り気味に終わる。体部外面は回転ナデ調整する。71は体部が深く、受け部が外上方へ伸びる。立ち上がり部は長く内傾する。口縁端部は丸く終わる。体部外面は上半を回転ナデ調整、下半をヘラケズリ調整する。体部内面は回転ナデ調整する。時期は70が7世紀中葉、71が6世紀中葉である。

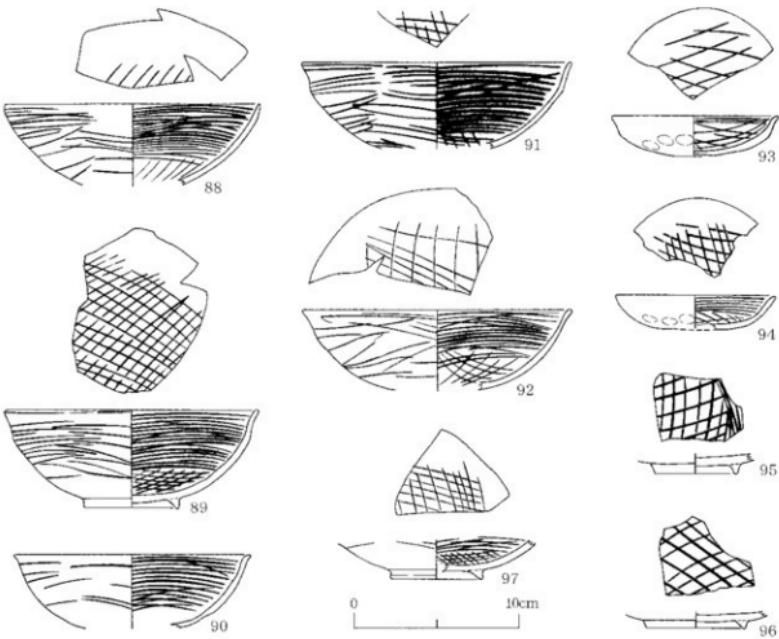
72は捏鉢である。束縛系である。体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は上方へ拡張し、面を持つ。体部外面はロクロナデ調整する。時期は13世紀である。

73は陶器の捏鉢である。常滑焼である。平底の底部に高い高台が付く。体部は外上方へ伸びる。体部外面はヘラケズリ調整する。内面は使用による磨り減りのため調整法が不明である。時期は12世紀中葉である。

74～80は土師器の皿である。74・75は丸底に近い平底の底部より体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はゆるく外反し、口縁端部が丸く終わる。体部外面はナデ調整する。76は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面はナデ調整する。77・80は丸底に近い平底の底部より体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユ



第20図 S地区第12層、堀肩出土土器実測図



第21図 S地区土A出土土器実測図

ビオサエ調整、内面はナデ調整する。78・79は底部が凹む。体部は大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。所謂、ヘソ皿である。体部外面はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。時期は74~76が13世紀後半、77・80が15世紀後半~16世紀初め、78・79が14世紀後半である。

瓦器は楕、擂鉢、羽釜、甕、深鉢の器種がある。

81・82は楕である。81は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面はやや粗いヘラミガキ調整、内面は密なヘラミガキ調整する。82は体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部は外反し、口縁端部が丸く終わる。口縁端部の内面に沈線を巡らす。体部外面は粗いヘラミガキ調整、内面は密なヘラミガキ調整する。時期は81が12世紀前半、82が13世紀前半である。

83は擂鉢である。体部は大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は幅広の面を持つ。体部外面はヘラケズリ調整、内面はナデ調整する。時期は15世紀である。

84・85は羽釜である。体部の張りは少なく、口縁部は内傾する。口縁端部は面を持つ。口縁部外面に84は3条、85は2条のゆるい段が付く。鍔は外上方へ長く伸びる。体部外面はヘラケズリ調整、内面はハケメ調整する。時期は15世紀である。

86は甕である。体部は内傾し、口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はタタキ調整、内面はナデ調整する。時期は14世紀後半~15世紀初めである。

87は深鉢である。体部が上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は面を持つ。体部外面はナデ調整する。時期は16世紀である。

土A (第21図 88~97)

瓦器は椀と皿の器種がある。

88~92・95~97は椀である。88~92は器高が高い。体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は外上方へ伸びるものとゆるく外反するものがある。口縁端部は丸く終わる。底部に断面形が逆三角形の高台を貼り付ける。外面はやや粗い分割のヘラミガキ調整、内面は密なヘラミガキ調整する。見込み部に平行線や斜格子の暗文を施す。95~97は底部である。断面形が逆三角形の高台を貼り付ける。見込み部に斜格子の暗文を施す。時期は12世紀前半である。

93~94は皿である。丸底に近い平底の底部より体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部は93が外反し、94が外上方へ伸びる。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整、内面は密なヘラミガキ調整する。見込み部に斜格子の暗文を施す。時期は12世紀前半である。石器（第22図 98）

98は滑石製の紡錘車である。約1/2を欠損する。形状は台形状を呈する。側面は2本の直線を入れ、その間に複帶鋸歯文を施す。底面は重弧文を施し、その間に直線文を入れる。時期は古墳時代である。第1~9層より出土した。

製塙土器（第23図 99~104）

99~104は製塙土器である。細片のため全形は不明であるが砲弾形を呈するものである。器壁は厚い。99~101は体部内外面をナデ調整する。102~104は体部外面をナデ調整する。内面に布圧痕が残る。時期は8世紀である。99・101・104は第1~9層、100・102は第10層、103は第11層より出土した。

埴輪（第23図 105）

105は円筒埴輪である。体部であり、低い台形を呈するタガを貼り付ける。内外面はナデ調整する。時期は6世紀である。搅乱層より出土した。

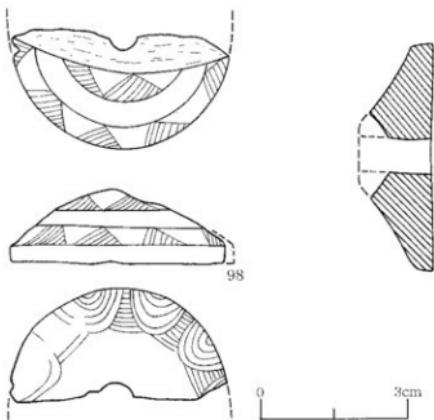
瓦（第23・24図 106~113・115~123）

瓦は平瓦・軒丸瓦・軒平瓦がある。

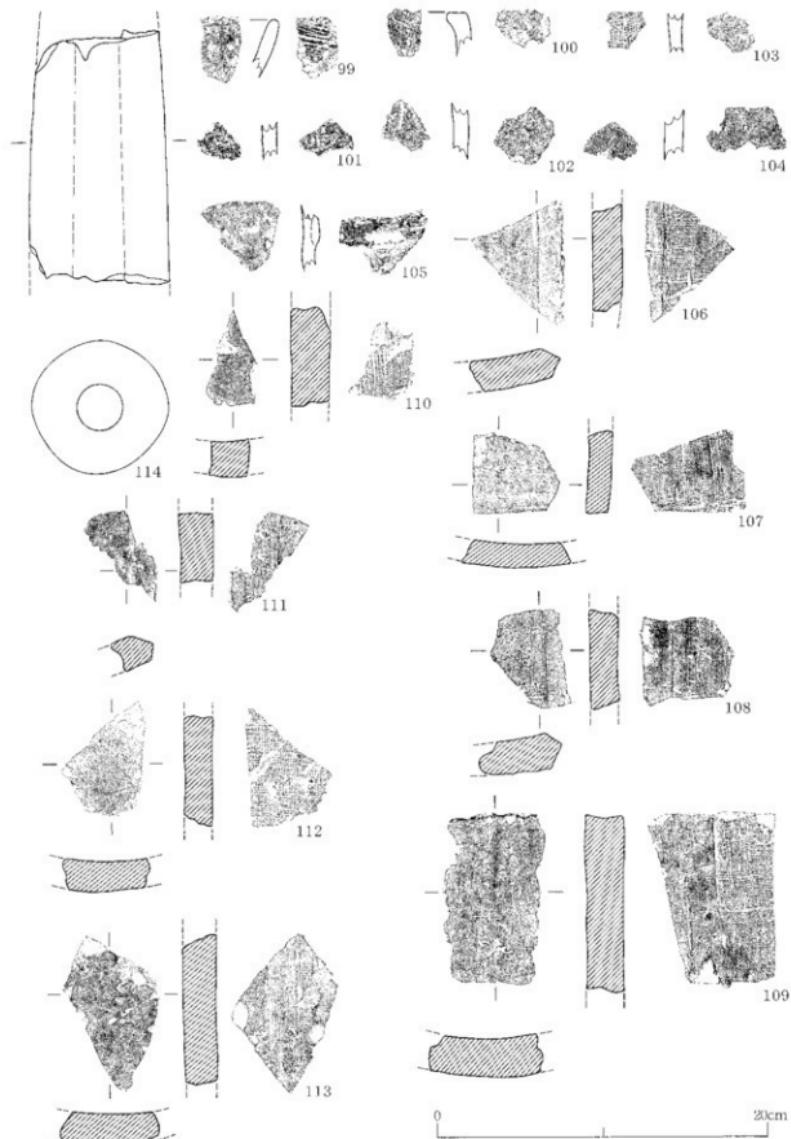
106~113は平瓦である。凸面に布圧痕が残る。凹面は丁寧なナデ調整する。焼きは非常に良く須恵質に近いものが多い。時期は白鳳~奈良時代である。106は堀、107・109・111~113は第1~9層、108・110は堀肩より出土した。

115~120は軒丸瓦である。115は素弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当部は中房、花弁、間弁が残る。中房は高い。花弁の稜線は弱い。116は複弁蓮華文軒丸瓦である。花弁は雷文である。117~119は巴文軒丸瓦である。巴文は右廻りであり、幅が広い。周縁部に珠文を配する。外縁は幅が広く、高い。120は巴文軒丸瓦である。巴文は左廻りであり、幅が狭い。圓線と珠文帯を配する。外縁は幅が狭い。時期は115・116が白鳳時代、117~119が平安~鎌倉時代、120は鎌倉~室町時代である。115・116・119は第1~9層、117・120は堀肩、118はS地区堆積土より出土した。

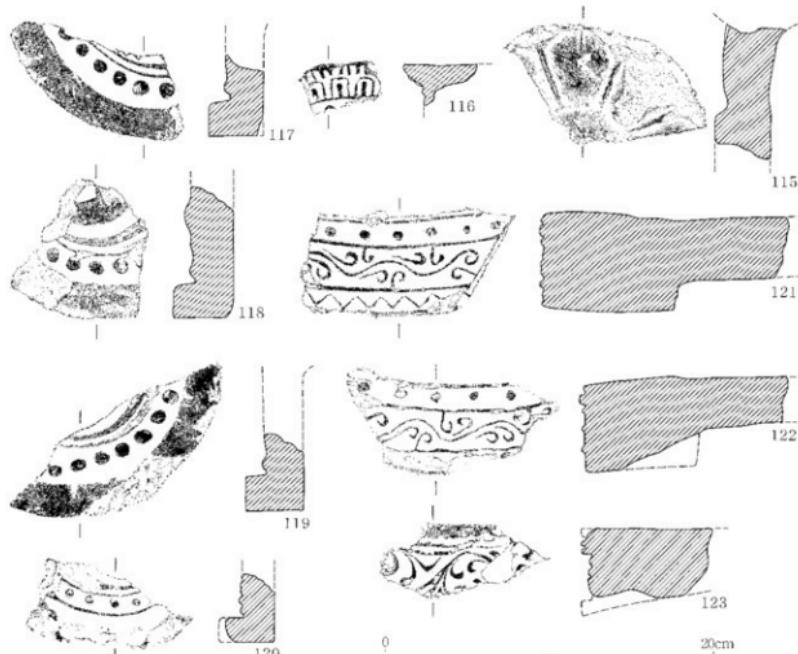
121~123は軒平瓦である。121・122は偏行唐草文軒平瓦である。頭は幅の広い段頭である。腹区



第22図 S地区石器実測図



第23図 S地区製塙土器、埴輪、瓦、土製品実測図



第24図 S地区瓦実測図

はない。内区は右偏行の唐草文を施す。上外区は珠文、下外区は锯齿文を施す。平瓦部凸面はナデ調整、凹面に布目が残る。平瓦部凸面には約2.5cm幅で赤色塗料が帯状に残る。123は唐草文軒平瓦である。凸面を欠損するので彫や調整法は不明である。凹面に布庄痕が残る。時期は121・122が白鳳時代、123が奈良時代である。第1～9層より出土した。

上製品（第23図 114）

114は彫の羽口である。上部と下部を欠損する。円錐状を呈し、径は上部で約7.5cm、下部で約8.5cmを測る。中央に孔を穿つ。径は上部で約2.5cm、下部で約3.5cmを測る。外面はナデ調整する。内面は被熱により赤色を呈する。詳細な時期は不明である。堀肩より出土した。

N地区

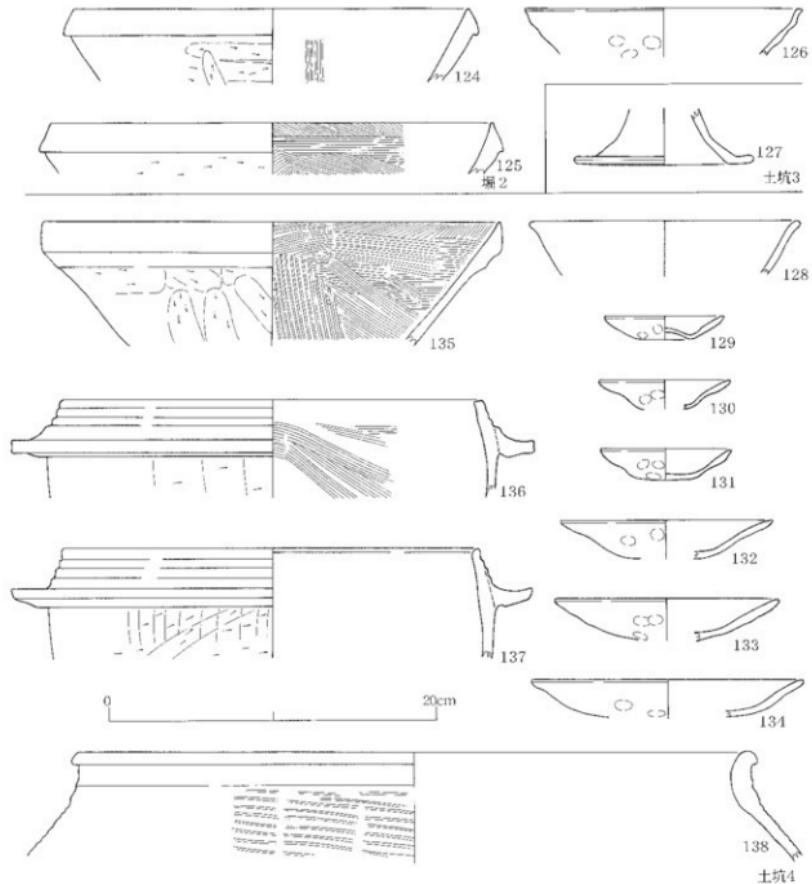
遺構出土の土器

堀2（第25図 124～126）

瓦器と土師器がある。瓦器は擂鉢、土師器は杯の器種がある。

124・125は瓦器の擂鉢である。体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は幅広の面を持つ。124は体部外表面をヘラケズリ調整、内面をナデ調整する。内面におろし目が残る。125は体部外表面をヘラケズリ調整、内面はハケメ調整する。時期は15世紀である。

126は土師器の杯である。体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部はやや面を持つ。



第25図 N地区塙2、土坑3、土坑4出土土器実測図

体部外面はユビオサ工調整、内面はナデ調整する。時期は10世紀である。

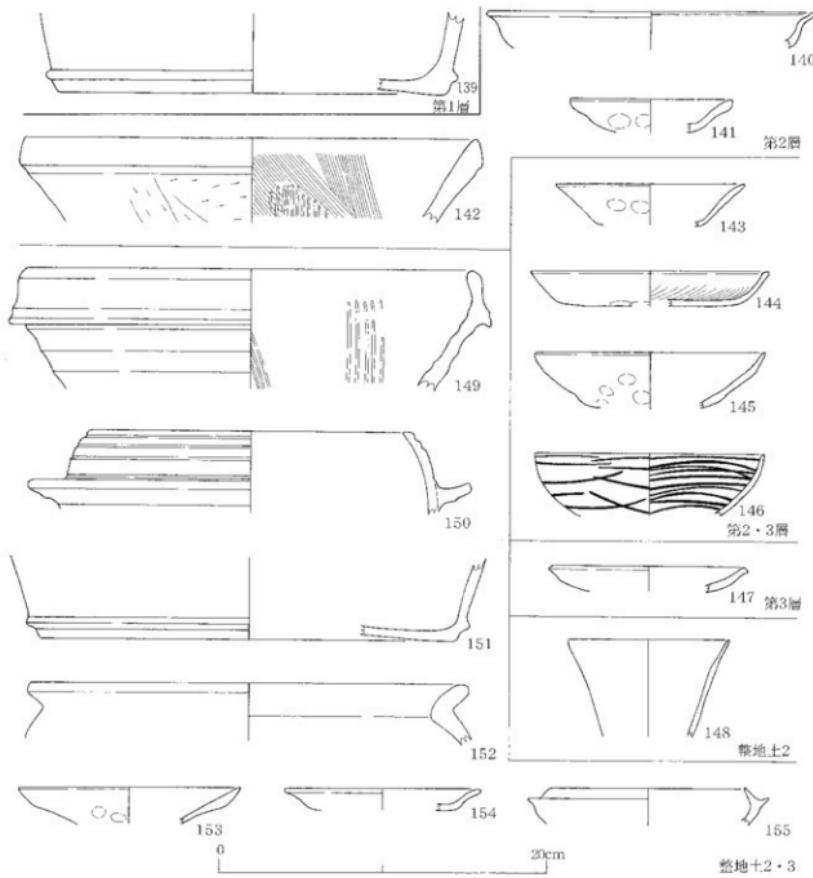
土坑3（第25図 127）

127は須恵器の高杯である。裾部はゆるく立ち上がり、柱状部でやや急になる。脚部内外面は回転ナデ調整する。時期は6世紀後半～7世紀初めである。

土坑4（第25図 128～138）

輸入磁器、土師器、瓦器がある。

128は輸入磁器の碗である。青磁である。体部が外上方へ伸び、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はロクロナデ調整する。内外面に施釉し、色調が濃緑色を呈する。時期は14世紀後半～15世紀初めである。



第26図 N地区第1層、第2層、第3層、第2・3層、整地土2・3出土土器実測図

129~134は土師器の皿である。129は底部が凹む。体部は大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。所謂、へそ皿である。体部外面はユビオサ工調整、内面はナデ調整する。130~134は丸底に近い平底の底部より体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終る。体部外面はユビオサ工調整、内面はナデ調整する。時期は129が14世紀後半、130~134が15世紀後半~16世紀初めである。

瓦器は擂鉢・羽釜・壺の器種がある。

135は擂鉢である。体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は幅広の面を持つ。体部外面はヘラケズリ調整、内面はハケメ調整する。内面におろし目が残る。時期は15世紀である。

136・137は羽釜である。体部の張りは少なく、口縁部は内傾する。口縁端部は面を持つ。口縁外面に3条のゆるい段が付く。鋤は水平方向に長く伸びる。136は体部外面をヘラケズリ調整、内面

はハケメ調整する。137は体部外面をヘラケズリ調整、内面はナデ調整する。時期は15世紀である。

138は甕である。体部は内傾し、口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面はタタキ調整、内面はナデ調整する。時期は14世紀後半～15世紀初めである。

遺物包含層出土の土器

第1層（第26図 139）

139は瓦器の深鉢である。底部はやや凹む平底を呈し、体部が外上方へ伸びる。底部の直上に1帯の凸帯を施す。体部内外面はナデ調整する。時期は15世紀後半～16世紀初めである。

第2層（第26図 140～142）

土師器と瓦器がある。土師器は皿、瓦器は擂鉢の器種がある。

140・141は土師器の皿である。140は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は内側へやや肥厚する。体部内外面はナデ調整する。141は丸底に近い平底の底部より体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。時期は140が9世紀、141が15世紀後半～16世紀初めである。

142は瓦器の擂鉢である。体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は幅広の面を持つ。体部外面はヘラケズリ調整、内面はハケメ調整する。内面におろし目が残る。時期は15世紀である。

第2・3層（第26図 143～146）

土師器と瓦器がある。

土師器は皿と杯、瓦器は椀の器種がある。

143・144は皿である。143は丸底に近い平底の底部より体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。144は平底の底部より体部が外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は面を持つ。内面に放射状の暗文を施す。体部外面はナデ調整する。時期は143が15世紀後半～16世紀初め、144が8世紀である。

145は杯である。体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。時期は10世紀である。

146は瓦器の椀である。体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面はやや粗いヘラミガキ調整、内面は密なヘラミガキ調整する。時期は12世紀前半である。

第3層（第26図 147）

147土師器の皿である。丸底に近い平底の底部より体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はゆるく外反し、口縁端部が丸く終わる。体部外面はナデ調整する。時期は13世紀後半である。

整地土2（第26図 148）

148は布留式土器の壺である。口縁部が長く外上方へ伸びる。口縁端部は尖り気味に終わる。風化が著しく調整法は不明である。時期は布留期である。

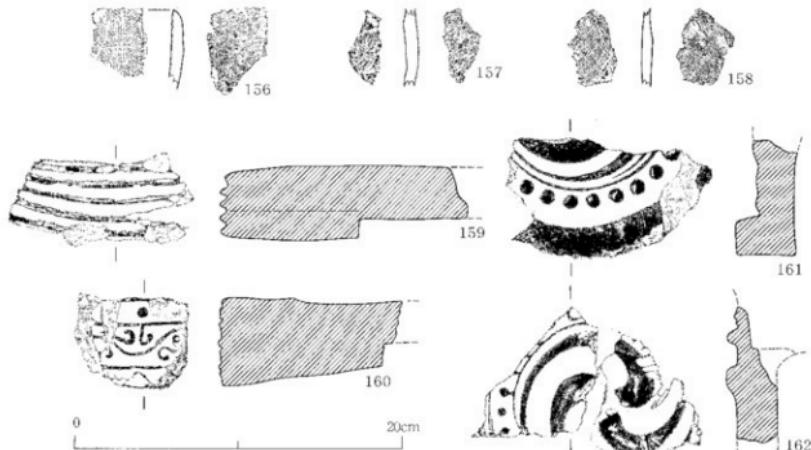
整地土2・3（第26図 149～155）

陶器、瓦器、土師器、須恵器がある。

149は陶器の擂鉢である。偏前焼である。体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は上方へ拡張し、幅広の面を持つ。体部外面はロクロナデ調整する。内面におろし目が残る。時期は15世紀後半～16世紀前半である。

瓦器は羽釜と深鉢の器種がある。

150は羽釜である。体部の張りは少なく、口縁部は内湾する。口縁端部は面を持つ。口縁部外面に4条の沈線を施す。鉤は外上方へ長く伸びる。体部外面はナデ調整する。時期は15世紀である。



第27図 N地区製塩土器、瓦実調図

151は深鉢である。底部はやや凹む平底を呈し、体部が外上方へ伸びる。底部の直上に1帯の凸帯を施す。体部内外面はナデ調整する。時期は15世紀後半～16世紀初めである。

土器類は羽釜と皿の器種がある。

152は羽釜で、外面はナデ調整する。時期は12世紀後半～13世紀初めである。

153・154は皿である。153は丸底に近い平底の底部より体部が大きく外上方へ伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。154は平底の底部より体部が内満気味に立ち上がる。口縁部はゆるく外反し、口縁端部が丸く終わる。体部内外面はナデ調整する。時期は153が15世紀後半～16世紀初め、154が13世紀後半である。

155は須恵器の杯である。体部が浅く、受け部が水平方向へ伸びる。立ち上がり部は短く内傾する。口縁端部は尖り気味に終わる。体部内外面は回転ナデ調整する。時期は7世紀中葉である。

製塩土器（第27図 156～158）

156～158は製塩土器である。細片のため全形は不明であるが砲弾形を呈するものである。器壁は厚い。体部外面をナデ調整する。内面に布庄痕が残る。時期は奈良時代である。156は第1層、157は整地土2・3、158は堀2より出土した。

瓦（第27図 159～162）

軒平瓦と軒丸瓦がある。

159・160は軒平瓦である。159は五重張文軒平瓦である。頸は幅の広い段頸である。平瓦部凸凹面はナデ調整する。凹面には布庄痕が部分的に残る。平瓦部凸面には約5cm幅で赤色塗料が帯状に残る。160は121・122と同文の偏行唐草文軒平瓦である。平瓦部凹面に布庄痕が残る。時期は159が白鳳～奈良時代、160が白鳳時代である。159は整地土2・3、160は整地土1より出土した。

161・162は軒丸瓦である。巴文軒丸瓦である。161の巴文は右廻り、162は左廻りであり、幅が広い。周縁部に珠文を配する。外縁は幅が広く、高い。時期は平安～鎌倉時代である。161は第1層、162は土坑4より出土した。

IV. まとめ

今回の調査では、平安時代後期から江戸時代中ごろに至る遺構および弥生時代から江戸時代にわたる遺物を検出した。以下、時代をおって概観し、まとめとする。

弥生時代から古墳時代初頭（庄内～布留式）の土器がとくに最下層の砂層から出土し、近辺にこの期間の集落が存したことがうかがえる。このことは古墳時代後半以降にもいえ、須恵器・埴輪などの遺物は出土しているものの遺構は見られなかった。

飛鳥時代以降のものとしては、素弁蓮華文軒丸瓦、複弁蓮華文軒丸瓦、五重弧文軒平瓦、偏行唐草文軒平瓦など白鳳から奈良時代の数多くの瓦とこの時期の須恵器・土師器・製塗土器などが出土した。遺構は検出されていないが、近隣に寺院をはじめ古代遺構の存在を十分知らしむる資料といえる。

平安時代後期の遺構としては南北方向の溝および上部が削平・擾乱された土坑（上A）があり、土坑内からは12世紀前半の瓦器碗・皿が出土した。いずれも砂層上面での検出であるが、本来の形成面（整地土）は後世の遺構によって削平されたものと思われる。西部の第18次調査でも砂上面において12世紀後半のピット・井戸などが検出されている。

鎌倉時代から室町時代前半についてては瓦・瓦器・土師器・輸入磁器などの多くの遺物は出土しているが、遺構は検出されなかった。

室町時代中葉から安土桃山時代にわたっては、若江城に伴う3時期の堀（堀1～3）などの遺構が見られた。堀は15世紀後半から16世紀代にかけてのもので、庵城後の江戸時代前半も大溝として機能していた。

堀1・3は東西方向のもので、第37次調査で西肩および南肩が検出されている堀の北肩を形成するものと考えられ、府道大阪東大阪線沿いにあった東西方向の堀=内堀に対する外堀にあたるものと思われる。堀1・3は、第37次調査で検出された南肩と対応し、堀3は南北幅約25m、堀1も約24mを測るものである。

堀2は南北方向で、堀1形成時に埋没しているのは確かであるが、堀1との関係、また第10次調査の東西方向の大溝=内堀との関係については明確にできなかった。

堀廃絶後の大溝は、堆積土内から江戸時代以降の遺物はほとんど出土せず、埋没したのは中葉をまたない時期であったと思われる。このことは、大和川付け替え前の若江の村絵図^①にもその存在が見えないことからもうかがうことができよう。

今回検出した堀の存在状況はこれまで想定が試みられてきた若江城の復元^②に一石を投ずる結果となつた。今後の周辺調査および研究に期したいと思う。

注

1 「若江遺跡第25次発掘調査報告」 財団法人東大阪市文化財協会 1987年

2 注1、

『若江遺跡第38次発掘調査報告』 財団法人東大阪市文化財協会 1993年。

前川要「河内における中世若江城惣構えの復元的研究－考古学的成果を中心として－」『光陰如矢－荻田昭次先生古希記念論集－』『光陰如矢』刊行会 1999年 など。

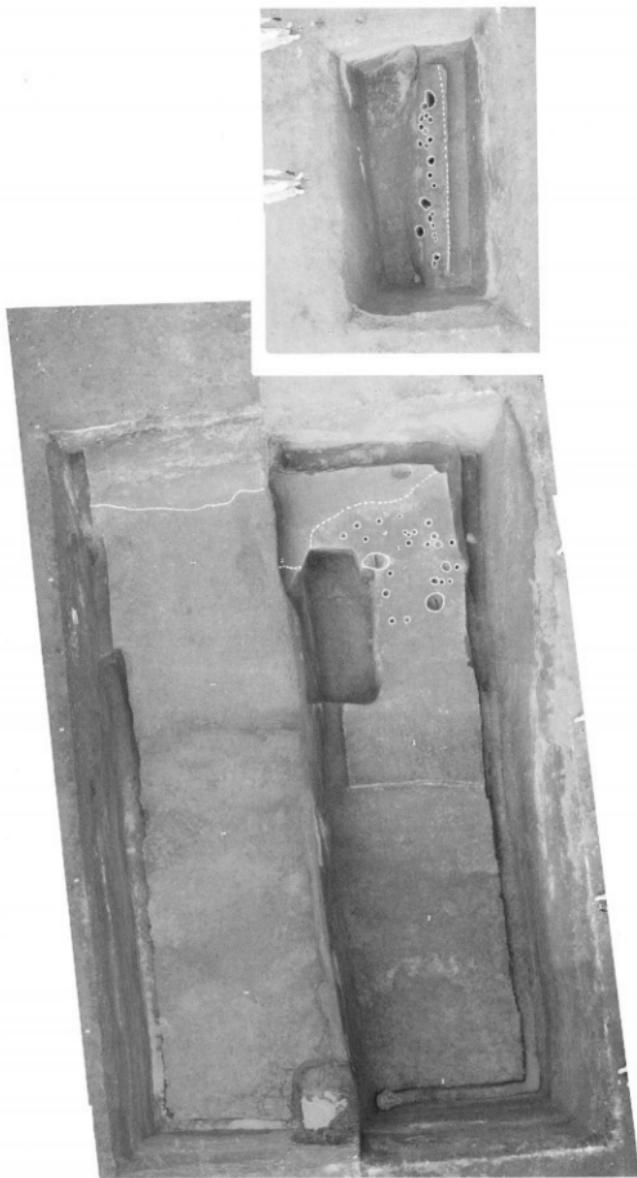
図 版



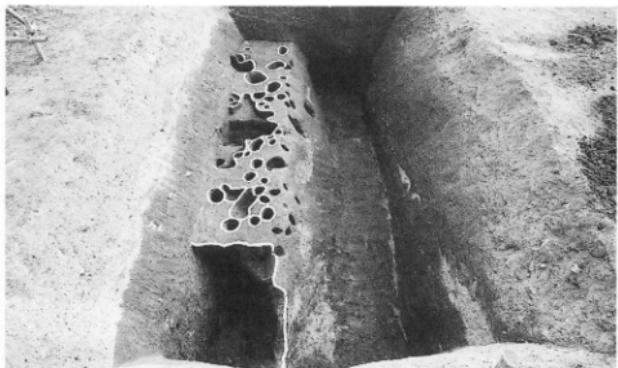
調査地周辺航空写真（1942年）

圖版
2

遺構



N地区(第4遺構)・S地区(第3遺構)写真測量合成図



1. N地区第5遺構（北より）



2. N地区第6遺構（北より）



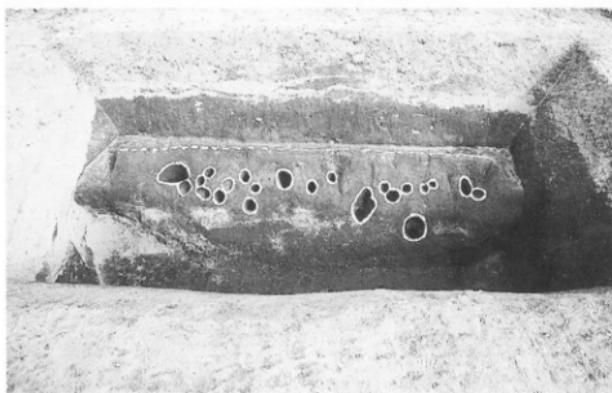
3. N地区南断面（北より）



1. N地区第1遺構（西より）



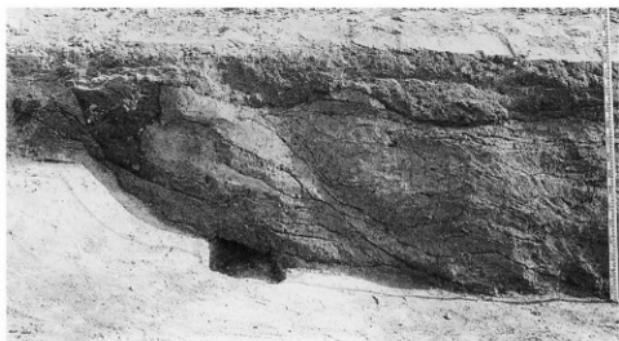
2. N地区第4上面遺構（北より）



3. N地区第4上面遺構（西より）



1. SW地区第6遺構（南より）



2. SW地区東断面（一部・西より）



3. SE地区北断面（一部・南より）

図版
6

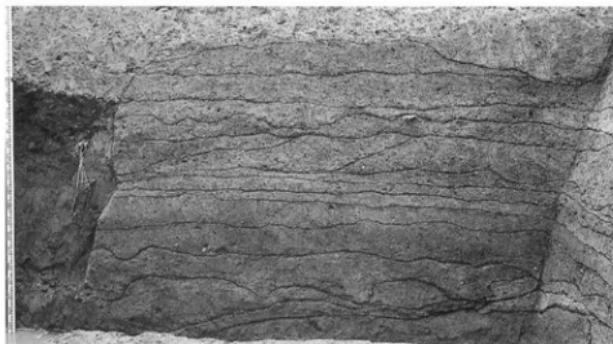
遺構



1. SW地区第3遺構（南より）



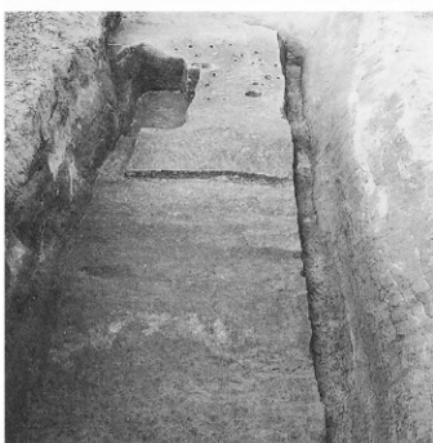
2. SW地区第3上面遺構（北より）



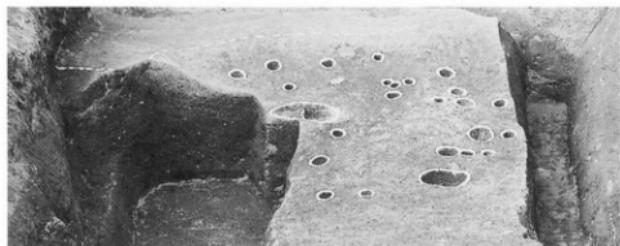
3. SW地区南断面（北より）



1. S E 地区第2遺構（北より）



2. S E 地区第3遺構（南より）



3. S E 地区第3遺構（一部・南より）

図版
8

遺構



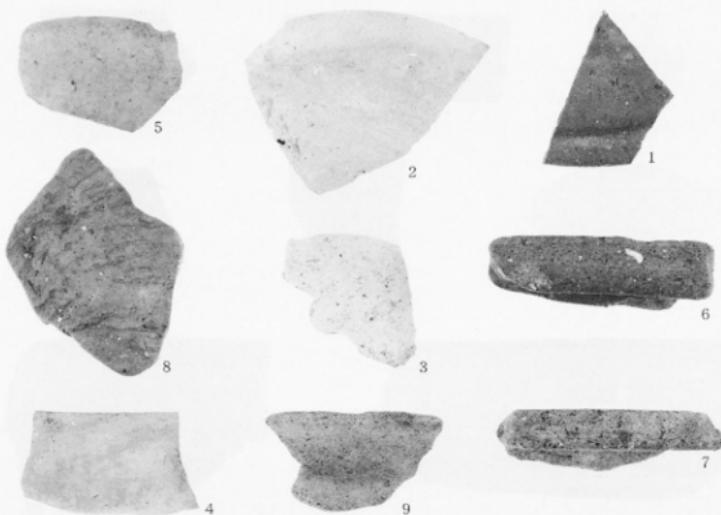
1. SE地区第1遺構（北より）



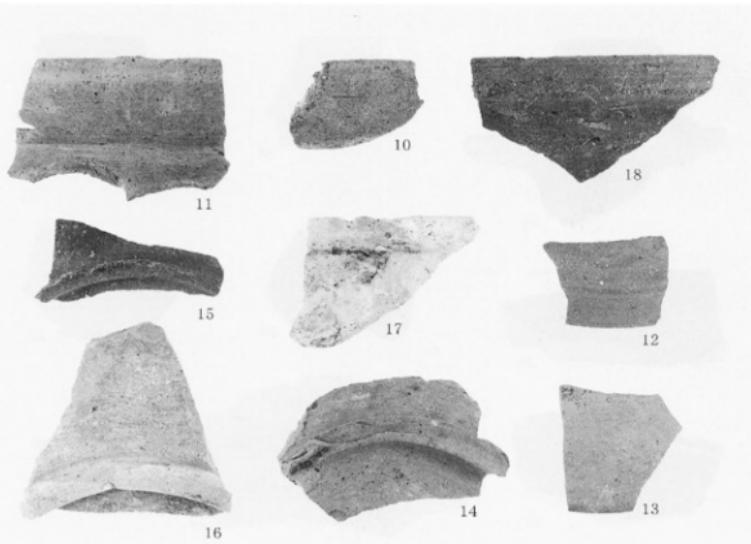
2. SW地区第1上面遺構（南より）



3. 土4断面（東より）



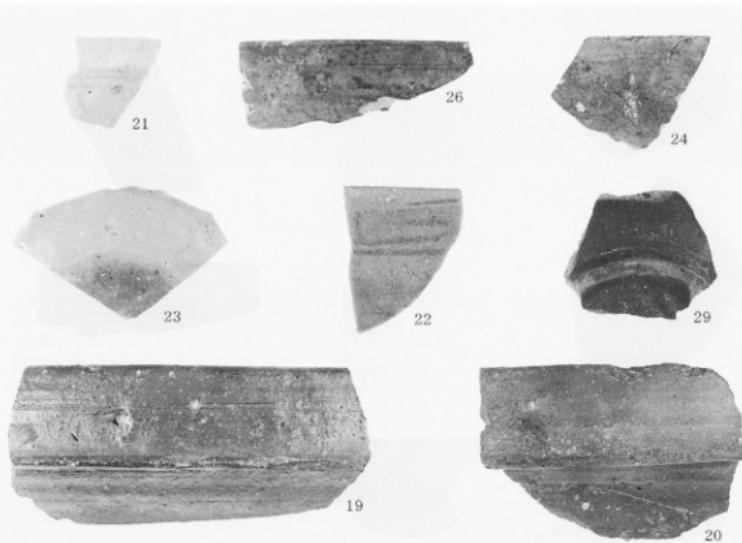
1. S地区縄1、土1、第1~9層出土弥生土器 壺・底部、庄内式土器 瓢、須恵器 蓋、土師器 盆



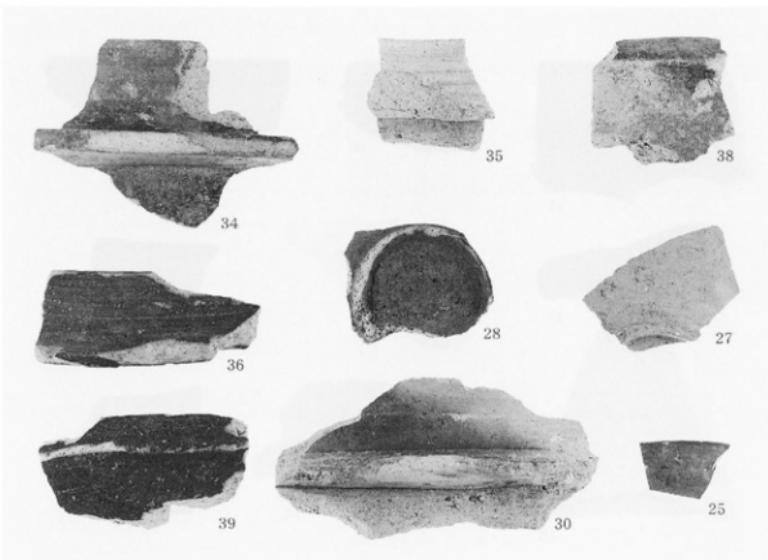
2. S地区第1~9層出土庄内式土器 瓢、布留式土器 瓢、須恵器 蓋・杯・壺・甕・捏鉢

圖版
10

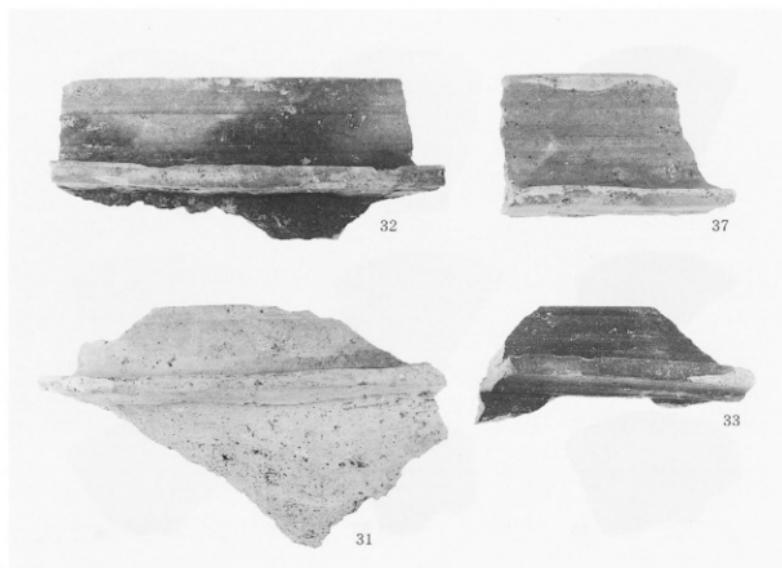
遺物



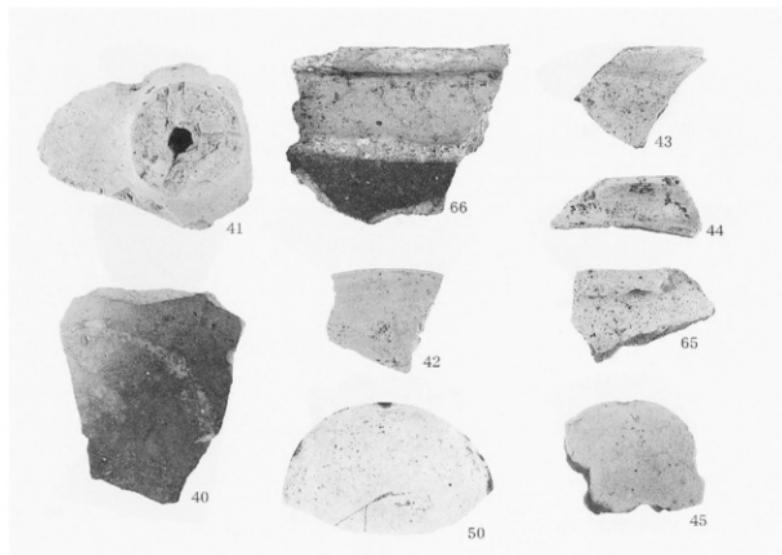
1. S 地區第 1 ~ 9 層出土輸入磁器 楠・皿・陶器 插鉢、黑色土器 楠、瓦器 楠



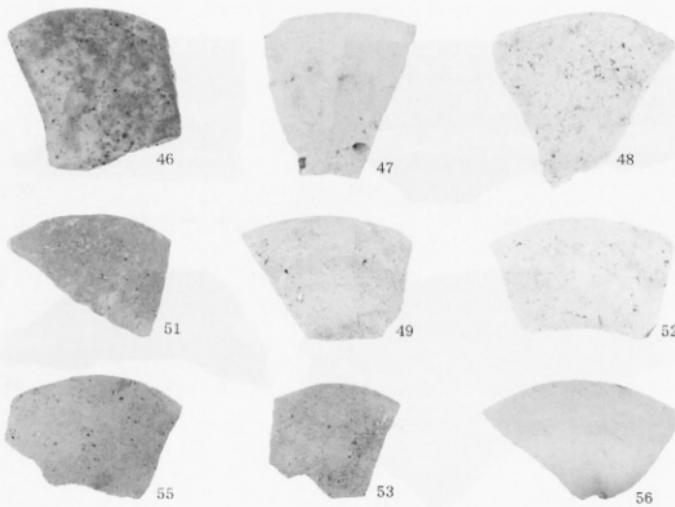
2. S 地區第 1 ~ 9 層出土土器 楠・羽釜・插鉢



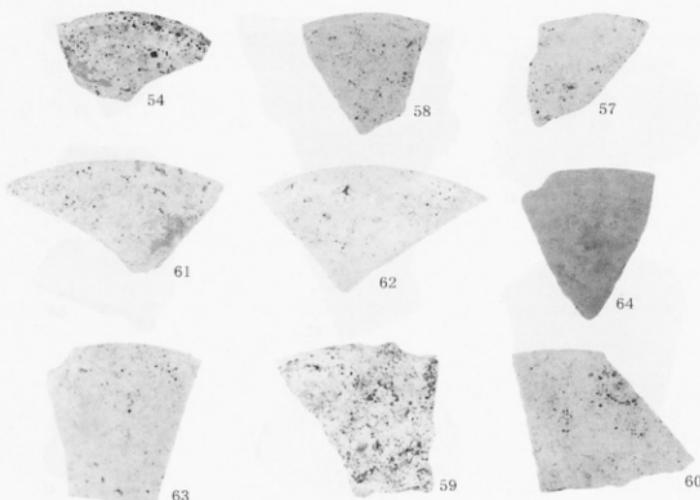
1. S 地区第1～9層出土瓦器 羽釜



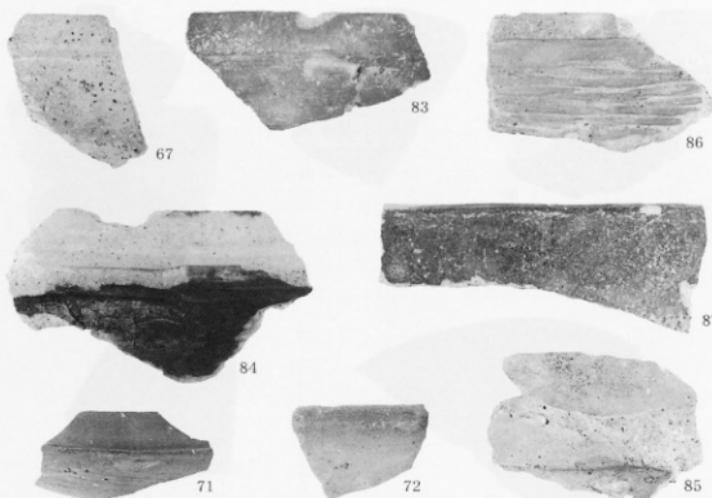
2. S 地区第1～9層出土瓦器 掣鉢、土師器 杯・甕・高杯・皿・羽釜



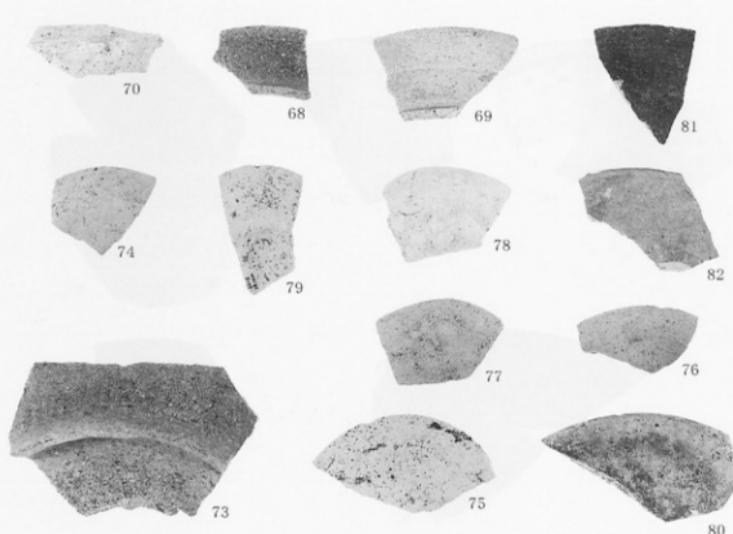
1. S地区第1～9層出土土師器 盆



2. S地区第1～9層出土土師器 盆・杯



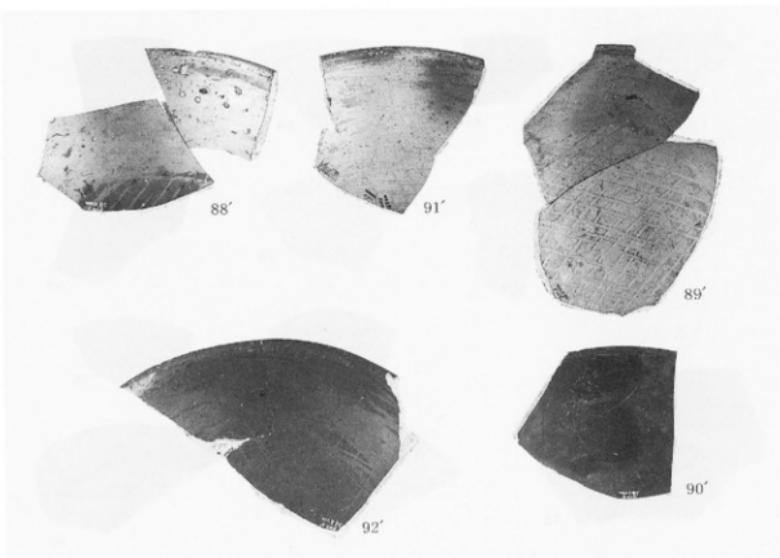
1. S地区第12層、堀肩出土瓦器 捻鉢・羽釜・甕・深鉢、須恵器 杯・捏鉢



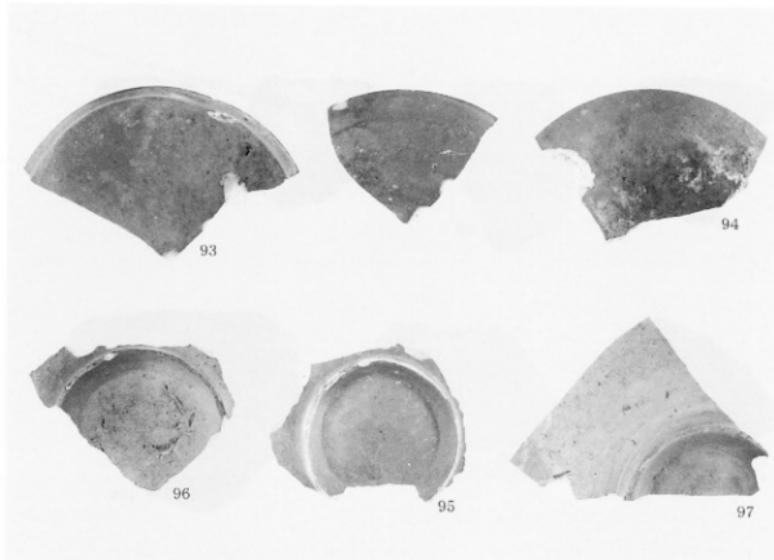
2. S地区堀肩出土庄内式土器 甕、布留式土器 甕、須恵器 杯、瓦器 椽、土師器 盆、陶器 捻鉢



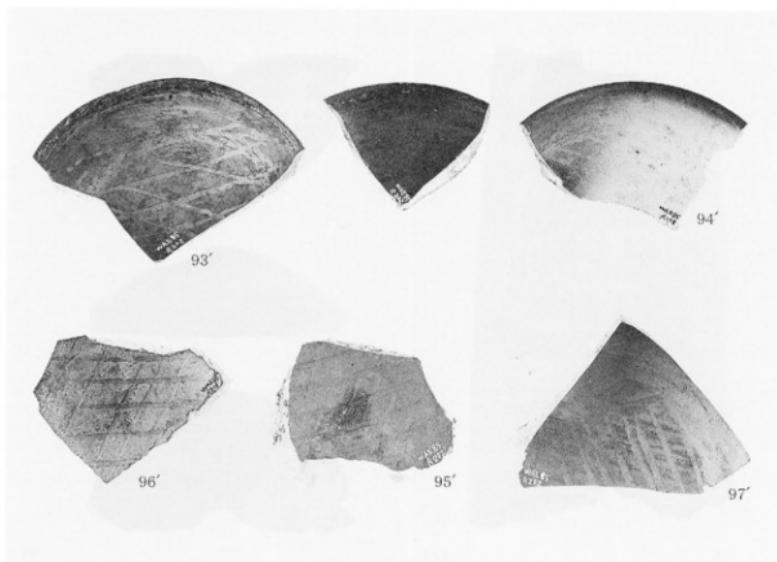
1. S 地区土A出土瓦器 楦 (外面)



2. 同上 (里面)



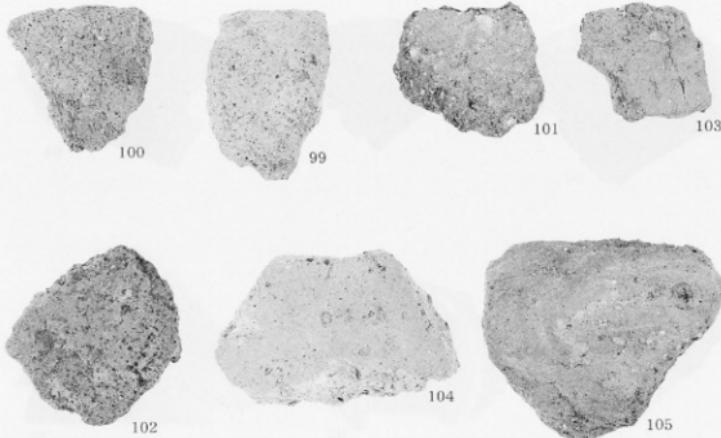
1. S 地區土A出土瓦器 楠・皿（外面）



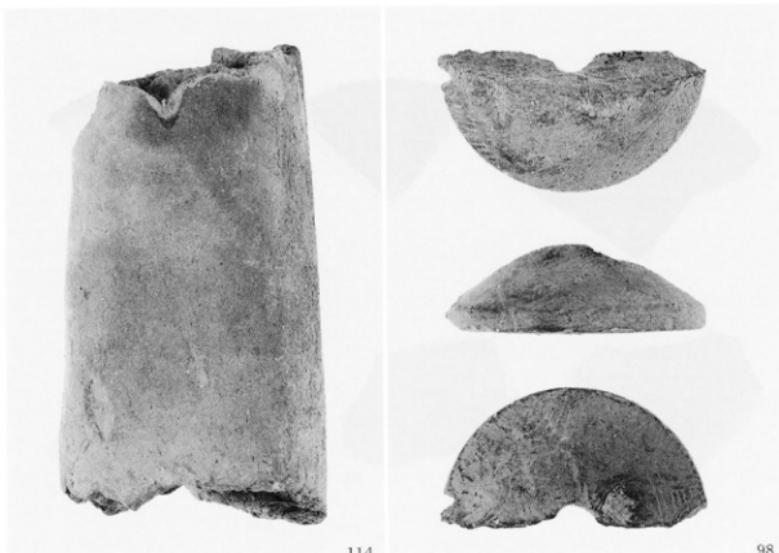
2. 同上（内面）

図版
16

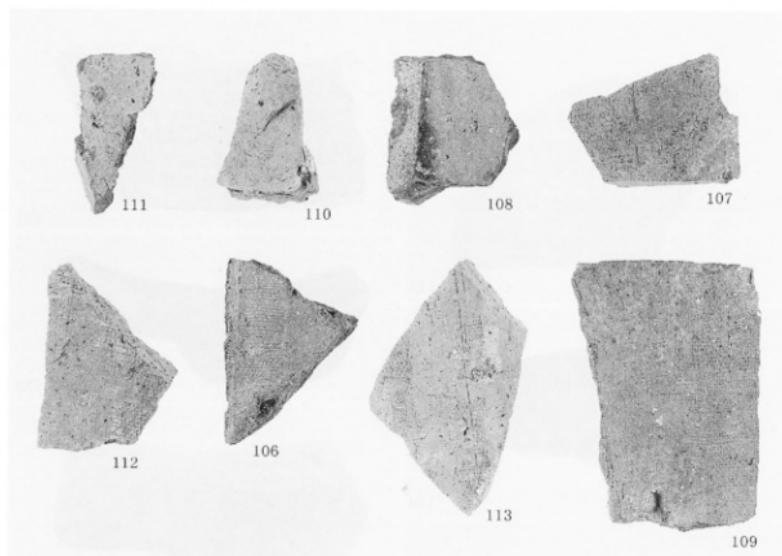
遺物



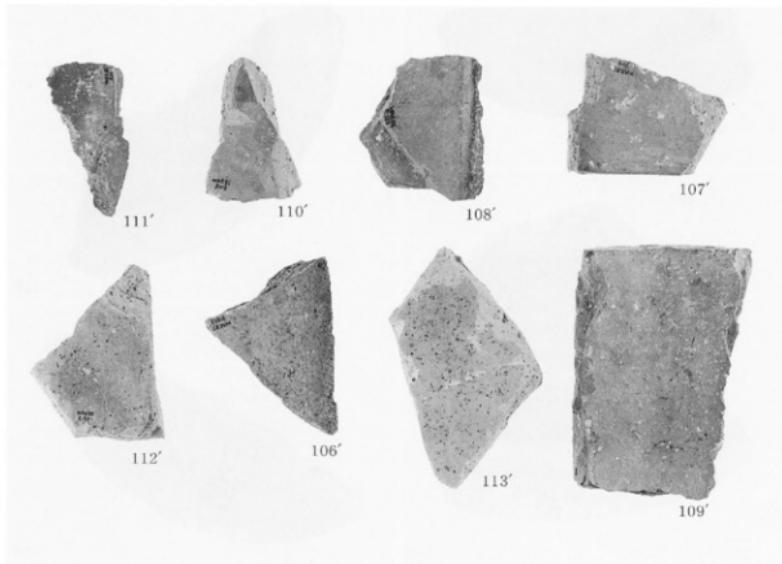
1. S地区製塩土器、埴輪



2. S地区石器 紡錘車、土製品 鞍の羽口



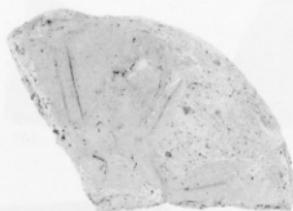
1. S地区瓦 平瓦(凸面)



2. 同上(凹面)

圖版
18

遺物



115



121



116



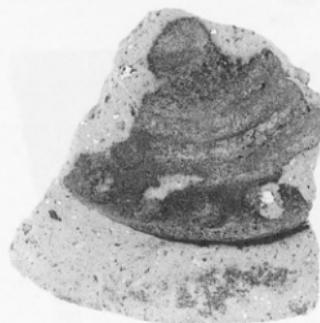
122



120



123



118

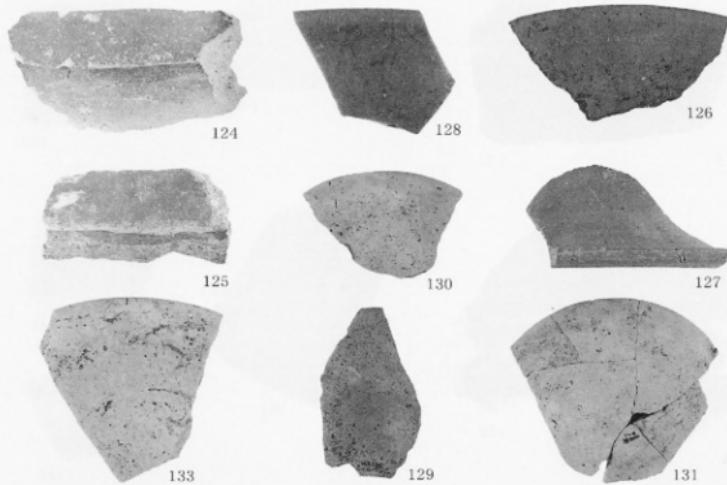


117

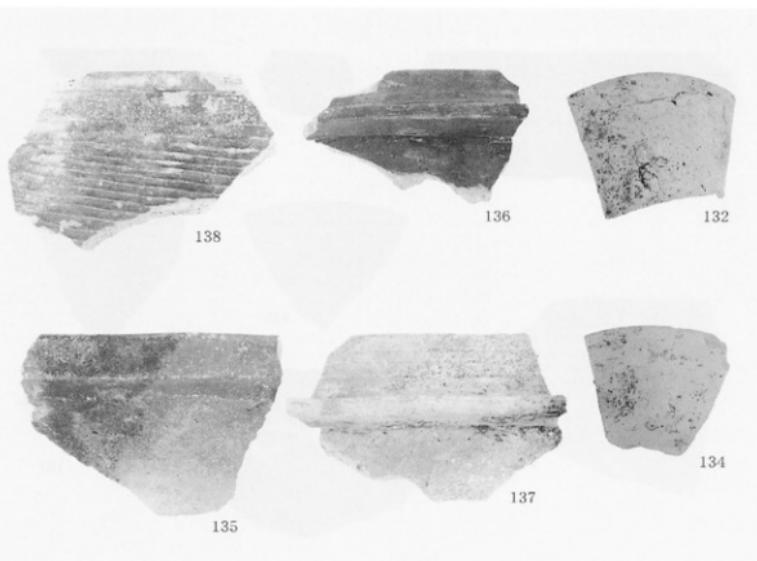


119

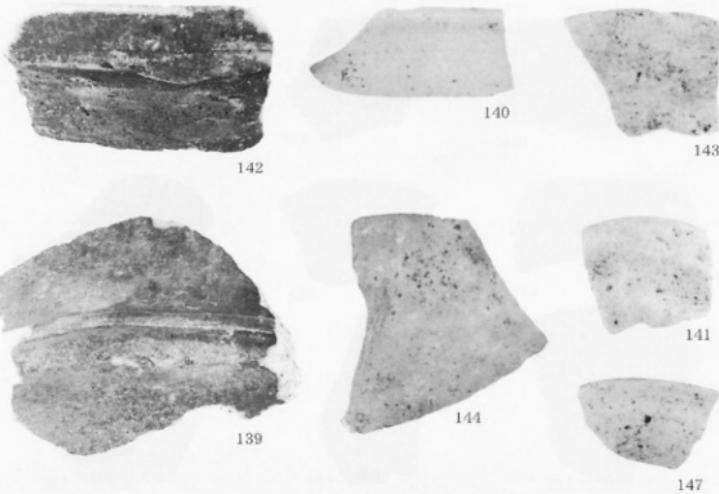
S 地區瓦 軒丸瓦・軒平瓦



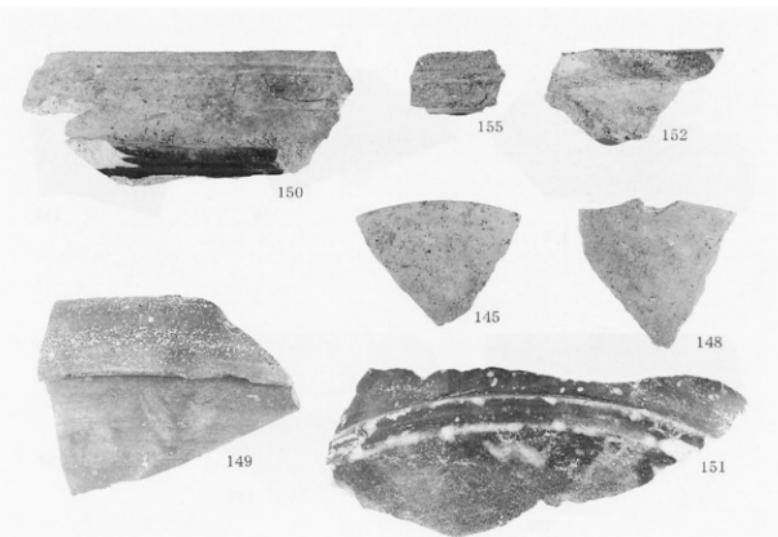
1. N地区堀2、土坑3、土坑4出土瓦器 插鉢、土師器 杯・皿、須恵器 高杯、輸入磁器 楠



2. N地区土坑4出土土師器 皿、瓦器 插鉢・羽釜・甕



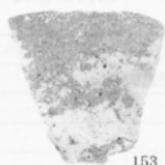
1. N地区第1層、第2層、第3層、第2・3層出土瓦器 捣鉢・深鉢、土師器 盆



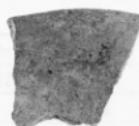
2. N地区第2・3層、整地土2、整地土2・3出土土師器 杯・羽釜・壺、陶器 捣鉢、瓦器 羽釜・深鉢、須思器 杯、布留式土器 壺



146



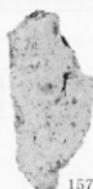
153



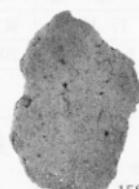
154



156



157

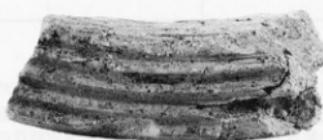


158

1. N地区堀2、第1層、第2・3層、整地土2・3出土瓦器 梱、土師器 盆、製塙土器



161



159



162



160

2. N地区瓦 軒平瓦・軒丸瓦

報告書抄録

ふりがな	わかえいせきだい85じはっくつちょうさほうこく					
書名	若江遺跡第85次発掘調査報告					
副書名						
巻次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編集者名	若松博恵・才原金弘					
編集機関	東大阪市教育委員会					
所在地	〒577-8521 大阪府東大阪市荒本北50番地の4 TEL06-4309-3283					
発行機関	東大阪市教育委員会					
発行年月日	2008年3月31日					
ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村 コード	遺跡 番号	調査期間	調査 面積	調査原因
わかえいせき 若江遺跡	おおさかふ ひがしのおおさかし 大阪府東大阪市 若江南町 こうなんまち 2丁目73-1	27227	98	平成19年11月12日 ～ 平成19年12月7日	177.9 m ²	共同住宅 建設
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
集落跡	弥生時代 ～近世	溝・壙・ピット・ 土坑		弥生土器・土師器・ 須恵器・製塙土器・ 埴輪・陶器・瓦器・ 石製品・瓦		

《要約》

若江城に伴う堀をはじめ、古代末から江戸時代の溝・ピット・土坑と土師器・瓦器・陶器・瓦などの遺構・遺物、そして弥生土器・埴輪・須恵器などの遺物を検出し、若江城の変遷過程、平安時代後半の集落の一端および弥生時代から平安時代の存続状況を確認した。

若江遺跡第85次発掘調査報告

平成20年3月31日

編集・発行 東大阪市教育委員会
印刷所 グランド印刷(株)

